

産土神三社宮 祭神、天照大御神・八幡大御神・春日祭神四座祭日。氏子九十六戸。境内三畝歩。除地。如此、里人口碑に今も言傳たれど、不審こそ思はるれ。三社と云るは、白山三社なるべし。白山と云ふことの傳は失て、只三社の號のみ残れるを、後人の附會せしにやあらむかし。抑今此宇津江の口村に、字藥師堂と云有、豪農杉下家邊を字大門といひ、同人の別莊の北方小高き平地を、字大御堂と號。其西方の山崎に、産土神三社宮坐り。按に【和泉名所圖會】卷之三、廿七、和泉郡牛瀧莊に記して書圖も三枚出せり。

牛瀧山大威德寺、古しへは、石倉五山と云、坊舎四十字在、本坊方は眞言宗、穀屋方は天台宗。本尊大威德明王惠亮作。不動尊役行者作。阿彌陀佛弘法作、并脇堂。役行者堂自作。多寶塔金剛界大日弘法作。求聞持堂虚空藏、弘法作。鎮守社辨財天、行者作。蛭子大黒社行者勸請。大師堂弘法大師畫影、眞如法親王筆。天照大神社大師堂傍に在。鐘堂大師堂の左に在。關御井本堂の傍。

役優婆塞開創にして、其後弘法大師惠亮和尚の中興なり。聖武天皇の御代、天下大旱の時、勅使此瀧に來て祈雨、忽沛然雨降、依之六十六州田園を此山に分入、六十

六段田と號。其後云。弘法云。叡山大乘坊惠亮此に來て、修法の時、大威德明王、第三の瀧より湧出、騎る所の牛は潭心の臥石、恰も青牛の水より踊出るに似たり。其石長四丈、瀑布之を挾て飛ながる。第一の瀧高二丈、第二瀧高十丈、第三瀧高四丈、此の三瀧の水源に、四十八瀧あり、且此一山楓多し、秋末には紅錦を布がごとし、麓より峰まで紅葉ならぬ所なし。坊中書院に映じて、人顔赤面を被たるがごとし、衣類諸器まで、紅をそそぐかとあやしまる、最奇絶の壯觀なり、騷人詞客、こゝに到らずんばあるべからず。【名所圖會】に悉しく記し、且記讚歌等出今略之。

右は四十八瀧の縁によりて記しつ。此宇津江村へ、古しへ美濃國長瀧寺の僧徒來て、寺を建住しによりて、大御堂・大門・藥師堂等の名の今に字に残れるならむ。其頃しも長瀧寺の本山平泉の鎮護の白山三社を祀たるが、其後寺と門と藥師堂とは、何年にか廢絶て、白山と云ふ號もうせて、三社と云名ののみ残れるならむか。四十八瀧 蛭水 共に瀧洞山内にあり。

打江觀瀑記

滄州老人、好山水遊、聞打江之山奥、有四十八瀑布、且疑且馳冥想者久矣、是歲春將往觀焉、余及其少子、從而同遊、

東北沿宮水過和田、狀三峯石於水中禮以石丈、遂躡梁而西北至打江、踰州治三十里、邑乎兩山墻立之間、而瀆宮水、有一溪水、過邑東注宮水者、即瀑之下流也、老人與邑之民有舊乃過焉、而問溪之道、其民遣僮前導、途遇雨未幾而霽、得一小灘、僮曰是曰厚朴瀑、四十八之一也、衆皆咲僮、僮亦悟焉、去之彌遠、而升之彌高、峰廻路轉、邑之面山已折矣、則右轉而西得櫻洞、地最幽曠、四面寂寥無人、青樹翠蔓、蒙絡搖綴、間露怪石、兩山之嶄然夾立者、至此益狹、而水聲之澄乎樹間者幽響洞然、遂南轉于山側、迤邐而上皆樵徑、行數步而、有垣然之地、土人植粒以積薪、名曰柴場、自此以往、山壁隱天、石勢突怒、水之湍流益迅、橫踰于溪尋

洞、西北道上、蓋數百步而回視、水之勢最奇、其來也若白虹之倒懸也、抵岬盪擊、爲湍爲瀑、山谷振響、其勝之可狀者有故、名今又不欲違其俗、上爲上灘、次爲函潭、潭在石穴、而函者方一丈餘、其深不可測、此香上流爲潭而吐爲瀑、瀑之奇、是爲第一、吾聞之溪上西南一峰、最峭者曰奔落壁、冬雪凝閉、伐木投之、若轉丸然即墜于函潭中、雖長二丈、陷沒不見、須臾水涌、而物跳出焉、眞是水府也、最下曰平潭、石面側立平如削、又攀躡而上、數百步稍旋而下、斜出于溪之側、仰望懸泉、數丈流沫生霧、衣履皆濕、不可嚮近、使人悄然心骨頓冷、是曰大瀑、蓋巨魁之謂也、其上流有瓶子口、下有京樹潭、京樹不知何謂、二者皆伏灌莽不可見、

圖之布瀑八十四裡坐江內



同游之士、班荆箕踞而游、會某甲使其任持酒具至、頗佐遊觀、然以其境過清、不可久居、而去過此登陟者曰瀑上、路甚幽峻、藤蔓石角、鈎衣刺眼、相與匍匐攀緣、極山之高而止、自始得洞口道入、叫窾陰近不恒見日、至此眼境豁然、正東諸峰、巖然乎前、衆皆稱快、又有一灘曰沙汰、蓋狀水之噴沫者也、僮曰、過此有益潭者、亦不甚奇、因問流杯之處、則曰距此十數里、曰溝越洞、源出于此、同游之士、已倦登陟、莫復窮源之意、逍遙盤桓、以將歸、相與尋故道、下行且回顧、大瀑及瓶子口京樹潭、皆顯然、下之數級、函潭上下之水、亦并觀焉、觀於此二所最奇、及製其圖、遂分爲二、此其概已、其餘之勝、不可枚舉也、然言四十八瀑布者、果虛誕耳、遂宿打江、主某甲家、厥明謁五社、訪蛤城山下文石、石最奇麗、其文可愛、有圖別存、遂東南遊荒城山中、取石墨、再宿而還、既歸記之、以告同志、余拙於修辭、是以不能盡狀其勝、後之遊者、或能盡之、

安永八年己亥暮春 臥牛山人赤田元義撰

林昌寺跡 年代不知、上北村大沼に引移し、天正十七年今の地に移、五峯山と號。

海具江堂跡 天正十七年増島に移、正覺寺と號。其後年代不詳、圓光寺と改。

共に内江村垣株洞に在、皆他村へ引移り、跡は耕地と成

りぬ。○垣株は後の山名をもしか云ふ、古川町縣の人家の垣根を助る株を、伐取に便よかりければ、垣株洞の名に負しにや。

瀧洞 宇津江山 六郎洞 大洞 殿洞 垣株 草、木、松、鳥、獸。

○高野村 上平^{上段}と 縦十一町、横一町四十間。下平^{下段}と 縦十二町三十間、横二町十八間。高二百四十七石二斗五升五合。山林段別木數不詳。家三十六戸。人二百四十餘人。産物 米百八十九石 稗二十石 大麥五石 小麥十石 大豆五石 小豆二石 粟十石 蕎麥三石 黍二石 桑二千五百貫目 麻二十貫目 楮十五貫目 茶・杏・柿・榲・ヒヨビ・ツクハネ。大蘭四十貫目 眞綿十把 小蘭百六十貫目 生絲二十五把 菜種三斗 鱒二十本 鮒一斗 鱒五斗 荏五斗 ジャウ五升 ウクヒ二斗 アヂメ一斗 年魚二千 タニシ五升 ムナギ十貫目 楮十五貫目 薪百二十間 鎌五十挺 釘五十貫目。

東 古川へ八町。西 畦畑越嶺一里。南 宇津江二十町。北 大村一里。高山四里。

村名義は、端場(方言に高崖を端場と唱ふ)下なる深河の岸上の平地を墾開きて水田として、水上五社の邊にて水を堰上、用水路を引來て其田を作り、村民は平生に水患を怖れ

て、田上の高野に家居せしゆゑ、高野村と稱しにやあらむ。

産土神白山社 【飛州志】に出、【村長書上帳】にも載たり。

【除地帳】には此社を不記。祭神白山三社大神。祭日。氏子。境内二段十六歩、除地。【除地帳】に、郷中抱觀音堂地と記せしは、是なるべし。觀音堂のみにては、境内の廣大過分なり。

鰐口銘 古川郷高野村白山權現鰐口、嘉吉二年霜月卅日願平朝臣助清、【飛州志】に、助清來由未詳。按に嘉吉二壬戌年は、中世前國司 初代藤原師言卿、應永晚年此高野古川城を築て向小島より來て居城の頃なり。平朝臣は國司の次官の人歟、附屬の人歟、猶能たつぬべし。

(宮茂加)

産土神阿加多宮 【飛州志】に出、【村長書上】に、高野加茂宮と記せるは、近世村民の唱誤れるなるべし。祭神。境内五畝四歩、除地。【除地帳】に、郷中抱阿彌陀宮地とあるは、筆者の誤、傍に書たる加字の書損なるべし。【飛州志】云、里人云、來由不詳といへとも、耕作守護神と稱り、按に縣宮なるべし。○【古事記傳】^{五十九丁}に、大縣・小縣云、阿賀多は上り田にて、元は島のことなりと有如く、此村は端場下の平地には、水田のみを作りて、村は元來高野にて^{外は}水ななければ、島のみ作り、川を隔たる古川町縣

吟云 の高田神社に對へて、阿賀多神社を拜祭り、祈年祭祝詞にある如く、甘菜・辛菜(今云、大根、蕪菁、百合、人參、芋、牛蒡、根葱、淺葱の類)を、毎日遠からねば、國府へ獻來りつらむ。

高野樂印尊 勸請來由未詳と村長書上たれども、何神とも解がたくなむ。

高野窟 寶曆の【除地高帳】に、葬穴を廟所と書り。高野村に五箇所記たるを、【飛州志】に、高野村に、數四窟有て、大窟一つあり、窟中凡長五間有餘に及べり、然るに天井は、只一石を以て覆ふと見えたり。里人の口碑に、古昔馬に乗ながら、窟中に入らせしとぞ。高野の大窟と稱する是なり。尤西一色と、廣瀬の窟に同じと記したるは、【古事記傳】^{六十五丁}の石祝作の註にて、古の石椰なること明白なり。又【聖德太子傳圖會】に、太子の廟、且【前太平記圖會】に、源賴光朝臣の葬所の圖あり、皆此窟と同じさまなり。【飛州志】の撰者も村民等も、古葬窟を知らで過しは、可憐ことなりけり。【蒲正村見聞錄】云、高野窟に古刀あり、其を掘出し持來る者は、必らず狂氣に成、又もとの如く埋置は、忽平愈ぬ、故に今は掘取者なしと云るは、然も有べきことなり。

【遠思樓詩抄】^{二七}の下

古塚

豊後 淡窓 廣瀬建

梵教東漸後、慎終情轉疎、古塚無人識、唯疑是穴居

權曰、諸州山腹有洞者、皆古塚也、發掘既久、今人不

復識、妄稱爲穴居之處、筑地最多、

蛤蜊城 應永晩年不詳 中世の飛驒國司藤原師言卿、此古川城を築、向小島城より移住、隱居して好風景を眺望して賞せらる。其後長祿・寛正の頃、國司左中將持言朝臣を、世に古川左中將と稱せしとぞ。此城に住れし故なりけむ。其後持言朝臣の庶子古川二郎の居城となり、享徳四辛卯年滅亡なりとぞ。其頃は古川城と云しとなり。其後鹽屋筑前守秋貞の居城、(弘治か永祿の初に來り住て、後に越中の内を押領せしとなり)天正の初、國司家臣牛丸相模守秀次居城、不詳 其後天正十三年乙酉八月、金森法印越前を出て、越中長谷へまはり、二ツ屋口より討入、此古川城に據て、高堂松倉を責落し、此に在城の頃、文石あるに依て蛤蜊城と名を改められしが、其後増島に新城を築て、移住しける時、此城を毀たれけるならむ。

蛤蜊石 右古城跡にあり。石高二尺七八寸、圍上にて三尺六七寸、中にて凡四尺三四寸、其性堅く色青く、鼠色に白紋多し。古昔雌雄兩石にて、常に白氣を吹けり、中昔旱魃の時、請雨の祈として、一石を山下の淵に沈めしに依て、

忽ち雨降しとぞ。其時より一石になれりとぞ。

石鏃俗云天雷斧 石鏃は、高山阿保邦彪曰、高野村蛤城の



麓、又字端場上の畠中より、春耕の節うち出せり、鏃矢も有とぞ。○【續日本後紀】卷第八天聖 承和六年冬十月己酉朔乙丑出羽國言、去八月廿九日管田川郡司解備、此郡西濱達府之程五十餘里、本自無石、而從月三日、霖雨無止、雷電鬩聲、經十餘日、乃見晴天、時向海畔、自然隕石、其數不少、或似鏃或似鋒、或白或黑、或青赤、凡厥狀體、銳皆向西、莖則向東、詢于故老、所未曾見、國司商量、此濱沙地而經寸之石、自古無有、仍上言者、其所進上、兵家之石數十枚、收之外記局、勅曰、陸奥出羽並太宰府等、若有機變、隨宜行之、且以上言、充制權變、令禦不虞、又轉禍爲福、佛神是先、宜修法奉幣、○【三代實錄】卷四十八天長 云、光孝、仁和元年十一月廿一日辛丑云、去六月二十一日、出羽國秋田城中、及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃、陰陽寮言、當有凶狄陰謀兵亂之事、神祇官言、彼國飽海郡大物忌神・月山神、田川郡由豆佐乃賣神、俱成此怪、崇在不敬、勅令國宰、恭祀諸神、兼慎警、○同卷四十九天長 云同二年四月十七日丙寅、

令出羽國慎警固、去二月、出羽國飽海郡諸神社邊雨石鏃、陰陽寮占云、宜警兵賊、由是豫戒不虞、とあるを見れば、古しへ雨し物なるべし。當昔本土よりは言上ざりしにや。

稻葉山上手洞 土中に石櫃あり。文政十一年秋、古川の何某其を掘て見しに、内に短刀と轡と有。崇あらむことを怖れて元の如く埋けるとぞ。

産土神五社 祭神【延喜式】神名帳下卷所載。荒城郡五社神。境内二町六段六畝廿三步。高七石六斗一升七合、除地。元祿七甲戌年、檢地名受、社人長三郎、同十二己卯年除地。此田畑屋敷九段七畝八步。甚廣大なる除地なり、【飛州志】に、神主家説曰、往古勸請年代來由未詳、當時古川城主を古川二郎と號、姓氏年代を不知、當城の鎮守たる故に、古川五社と稱、云と記たれど、それより先、中世初代國司藤原師言卿此村の古川城を築て、向小島より來て、隱居して好風景を眺望、老を樂しまれしとなり、其頃應永の晩年か、正長年中に至、古川城鎮守の爲、此五社を勸請せられたるならむ。古川二郎は其國司の孫也。○祭神は大己貴命のみにて、餘は皆多聞天・不動・虚空藏・地藏等安置るを、長谷川忠崇【諸神根元集】を引て【神祇要編】なる地神五代の【古事記傳】【古史傳】其外諸書にくわ

しければ、爰に省きつ。皇大神方に、本地佛を附會て記せるは、皆浮屠氏に迷へる成るべし。永享の初より然るにや。此五社鐘の銘に、喚醒無明煩惱身、一聲月百古川濱、などの忌々しき句有なるべし。其鐘に、永享元年己酉天三月吉日とあり、(永享元年己酉歳は、中世初代國司師言卿、古川城隱居中なり)○神鐘後銘に、又康正三年八月日藤原家氏とある、是も通稱知れがたし。(康正三年は中二代國司、持言朝臣の時、家氏は其家宰にや)○隨身像裏書、竝棟札文詞の天正五年丁丑六月吉日、本願牛丸相模守秀次、(此後、秀次事蹟不詳、病死せしにや。且天正五年は、姉小路幼主出走、牛丸重親か追兵と後藤帶刀と角川合戦、重元討死せし年也。牛丸秀次は、國司姉小路明山の家臣、古川城代なるべし。○【浦正村記録】に、五社は里傳曰、古川城の麓に古しへ式内の八座の中、荒城郡の五社を、勸請られしとぞ。禮按に、實に然るべし。其は故國司の處置なるべし、さることを【飛州志】年中 編集の頃は、何とて申立さりつらむ。【式】の荒城郡五社は即大津神社(天は天の誤にて天津神社なるべし。荒城郷の最初に載たれば、名張郷(今云廣瀬郷)なること疑なし、是即村山天神なるべし。遊遊郷(今云高原郷)の神社を、最初に出す謂なし)荒城神社(荒城郷、今云吉城郷宮地村河伯神社、祭

神は其處に可記。高田神社(深河郷、今云古川郷古川下町に、高田神社の神屋鋪残り。天正年中、上北村に遷して杉本社と合祀りしとぞ)阿多由太神社(高家郷、今云小島郷、杉崎村中の社といへり)栗原神社(遼遊郷、今云高原郷宮原村、栗花落祭神社と唱來れり)を拜祭れる成べし。いとめでたきことなりけり。

○畦畑村 縦十六町、横二町。東組縦十一町、横一町三十三間。西組高百八石三斗三合。山林段別木數不詳。家四十七戸。人二百六十餘人。

産物 米五十石 稗百石 大麥四石 小麥四石 大豆十石 小豆五石 粟一石 蕎麥十石 大角豆一石 桑四千貫目 麻五貫目 楮十貫目 榲・ヒヨビ・山女小 蘭百五十貫目 生絲二把 薪五百間 石ガマ炭八百貫目 白藤十荷 荏 菜種 筥笥二貫目 藤笥 菌五十貫目 山菜、ハシバミ三斗 アケビ三十貫目 クサエビ十貫目 ヒヨビ一貫目。

東方 高野村一里。西方 池本村、山越三里。南方 山。北方 寺地村一里、高野村嶺越一里、平岩村へ同半里。高山四里半餘。

村名義を【和訓栞】に、宇彌は【神代紀】に、田畑を訓り、壘も同じ、殖根の義成べし。脛は田のウネ、畦は畠のウネなり。【靈異記】に畝もよめり。【古今集】近江ぶりに、ウネノ野見

えたり云とありて、共に古言なれば、文字のまゝ、成べし。大和國には、畝火・畝尾等、名高き地名あり。産土神諏訪神社 祭神健南方刀美命本像 祭日。氏子。境内三畝歩、除地。

同白山神社 祭神白山比咩神。祭日。氏子。境内無除地。東ヶ洞 西ヶ洞 石佛山 草木、桂・榲・榲・榲・鳥獸。

○是重村 縦十一町四十間、横三町四十間。高四百八十八石四斗七升。山林無之。家十七戸。人七十餘人。

産物 米三百八十八石餘 稗十九石三斗餘 大麥十五石 小麥十九石餘 大豆二十石餘 小豆二石二斗餘 粟九石一斗 蕎麥一石一升 黍三石 荏八斗八升 桑二千七百九十貫目 麻一貫六百目 楮十一貫目 藍葉四十貫目 大蘭十五貫目 小蘭六十五貫目 生絲六百目 鱒二十本 鱒一斗五升 フナ・ウグヒ・アヂメ一斗四升五合。

東方 山本へ五町。西方 古川下町二町、高野村へ渡橋十町。南方 古川上町三町、廣瀬町村へ二十町。北方 古川町縣八十二町。高山三里廿一町。

村の名義は、村民申傳へには、古昔不詳是重と云る人此村を開發し故、其の名を唱へ來れる由いへり。實にしかるべし。但、開發は、高田を水田にせしを、誤りて唱へ來れるならむ。古しへは五十戸を一村里とし、戸數少ければ多き方

に附し由なれば、此處は古川町縣の枝村にて、是も高田のみ故、貴布禰社を祀りて、陸田種子を作りて、早に損れぬやうにとて平生祈たりしが、年代をへて大同元年に、觀察使來りて、古川上町の栗原の神社を、島宮に遷奉らせ、廣大なる栗林を伐盡させ、新田を墾開せし時、此枝村も古川町縣

今も下町の人民も、皆々悦合て、上町の栗の根株を堀取地を堀下げ平均して、治田今村にて荒木川の水を堰上、用水路をひらき、水を引來て、上町以下の高田を水田にせし時、其の事に甚だ大切ありし是重と云ふ男の住る處故、みなく、是重在處と云つらむ。其を後に年代不詳、其枝村お

のづから別村に成て、十餘不詳是重村と唱來しにや有らむ。産土神日吉社 【除地帳】に山王宮地と記、【檢地帳】も然るべし。宮社無之。祭神日枝大山咋神、神靈代銀杏大木一本 凡二園許。境内二畝廿四歩、除地。

堀田社は、古へ高田を水田に爲し、大功のある是重の靈を祭りしならむ。後世も新田を開きし人の靈を、處々に祭れる例あまたあり。故堀田社と云しを、其の傳を失ひて、後に日吉神を合祀りしならむ。

同一宮社 向是重鎮座、無民家。祭神水無大神。境内十八歩 除地。勸請年代未詳、御年神と神武天皇御靈とに御座ますべし。

右二社年代不知、社殿とも廢失。

同杉本社地跡 古しへ古川の町家は、上町と下町との間に在けるが、産土神は此村なり。其頃は舊社跡なりとぞ。其は天正の末、金森家増島城を築き、古川町家を増島野に移されし時、此杉本社をも上北村に引移し奉りて、其後社地を田に切開きたりしが、元祿年中に至り檢地を受けてより、今に至るまで其の田字に残れり。今も其の田に糞を用れば登らず。柴と石灰とを肥に用ひて佃とぞ。産土神貴布禰神社 祭神高靈神。祭日。氏子。境内一畝廿二歩、除地。

【神名式】山城國愛宕郡貴布禰神社、名神大、月次新嘗、とあるを勸請て祭れるなるべし。○【三才國會】云、貴布禰神社、在愛宕郡鞍馬山乾、祭神高靈神、伊弉諾尊、斬軻遇突智、爲三段、其一段是也。水神而禱祈之則有應驗也。水神は寺島良安が附會ならむ。○【神代紀】一書には閻靈、一書には高靈とあるを、【古事記】上卷には、閻湊加美神とあり。傳に久良は谷のことなり、高は山の上なる龍神にて、雨を物する神なり云云。○【大日本史】卷二十三、【嵯峨天皇本紀】云、弘仁九年戊戌、夏四月十三日丙寅、(四月より神佛にさまざま祈りて、雨を乞たまひけれど、驗なかりければ)秋七月七日己丑、以旱停節、(早ゆるに、

禁中の節會まで、停たまひしなり。十四日丙申、遣使貴布禰山城國及室生山龍穴、大和國宇陀郡祈雨(其時潤雨ふりしかば)冬十月九日己未、以祈雨有應、賽貴布禰社(全此神の靈驗の多に、此賽奠ありて、此後も亦、早にも霖雨にも、此神に祈玉ふこと、恒例となりぬ)十年己亥夏五月十七日甲午、行幸神泉苑、祈雨貴布禰(去年弘仁九年の例に依てなり、又靈驗ありて霖雨ふりけるにや)六月九日乙卯、奉白馬於丹生川上(天和國吉野郡)貴布禰、祈晴(祈晴には、白川上祈雨(祈雨には、黒馬を奉らるる例なり)二十八日癸酉、祈晴貴布禰、晦乙亥祈晴丹生川上、(此後歷朝祈雨、祈晴は猶歴史にくはしく出たり)など有て、朝廷にては、祈雨祈晴には、必らず山城國貴布禰と、大和國丹生川上雨師神とを祭り玉ふ例也。其にならひて、河内國石川郡に太邨於賀美神社、茨田郡に意賀美神社、和泉國和泉郡に意賀美神社、日根郡に意賀美神社あり、其外【神名式】に委し(外の國々なるはこゝに略きぬ)【新古今集】卷十九、神祇歌に、社司ども貴布禰に參りて、雨ごひし侍ける序によめる、賀茂幸平

大御田のうるほふばかりせぎかけて、るせぎにおとせ川上の神

猶種々あれど省きぬ。此是重村は、古しへ水利なき高田(縣と同じく陸田なり)にて、潤雨なければ、作れる陸田種子も枯果ぬれば、別て貴布禰の高靈神を齋祭りて、時々潤雨ふりて、作毛の豊饒を祈りしなるべし。○村民は、此の社の祭神を彌都波能賣に座ますと書上げたるは、【和名抄】に水神また蛟を、和名、美豆知とあるに因るにや。其はともあれ、前に記すとく、嵯峨天皇以來後世に至るまで、晴雨とも貴布禰神に祈たまひしことなれば、此村にて祭れるも高靈神なるべし。大野郡冬頭村・坊方村、益田郡馬瀬中切村の産土神も同神なり。當昔は何れも畑のみ多かりつらむ。

○古川町方村 枝村上町、下町、大野、旅館、町裏、仲之瀨 地誌 高山陣屋より北方三里二十二町、國府村へ一里三町、細江村へ二十六町、小鷹利村へ十五町、舟津町へ五里。高千二百八十八石五斗三升四合。山林無之。家七百七十五戸、外二戸。人三千五百五十餘人、外九人。産物 米千八石 稗七十四石 大麥四十二石五斗 小麥四十九石 大豆四十石 小豆四石五斗 粟二十一石 蕎麥四石三斗餘 黍六石 荏三石八斗 胡麻二斗餘 菜種十六石五斗 大蘭四百五十貫目 絲四十二箇 小蘭千六百二十貫目 絁十疋 紬五十疋 絹十疋 眞綿四百十把 蠶種千五百

枚梨十石 楮四十三貫目 藍三百三十貫目 蓴菜 銀杏一石二斗五升 桑二萬千四百五十貫目 椴木地 年魚千 鱒百十五本 鱒三千ウグヒ二千 鰻六貫目 鮒三百 アヂメ一斗 ドジャウ一斗 酒銘酒、松枝、小竹枝、大江、山松皮、瑛、瀨原、瀨原 七百六十石 木油 泔油。

○蠶飼は此村に限らず國中村々押並て、百年前に競ては、一階にも成りぬべし。此の村にては絲ひき紬を織り、眞綿を製て生計とす。郷中及他郷よりも、繭を買てしかせり。○梨はよく地に應ひて、古來家ごとくに園庭に植えて、年々梨子を取る。當村はさらなり、高山町其の他へも賣出す。皆古川梨子と持てはやせしを、慶應元年春火災にて皆焼失せぬ。其後又若木を得て植付けぬ。○蓴菜は、昔金森侯他國より種を持來て、増島城の隄に植えられしが、今に残りて當村の産物と成りぬ。○桑は川の東北方に能く應ひて、當村は殊に繁茂せり。○泔油は、米の泔水を浙して濁れるを乾して搾れり。文久年中、増田頼興縣令たりしとき、當村にて始めて搾りしより、諸方にも習ひ傳へて製す。○木油：○鱒は、宮川と荒城川と、兩川ともに年々に上れり。年魚は宮川へのみ上りて、荒城川へは古より上らぬとぞ。水嵩少ければなるべし。○椴木地は、小島郷・小鷹狩郷の兩山中の村々の山に棲める木地師に

挽かせて、此里より他國紀伊國、日向國へ送出して賣ぬ。

東方 山本村十六町、上北村へ八町。西方 大村へ十六町、平岩村へ十五町。南方 是重村十二町、宇津江村へ廿五町、廣瀬町村へ一里。北方 下北村へ八町、中北村地續。高山三里二十二町。

村名義は、上古より深河は(宮川の流末廣瀬川とも云)水勢甚強く、年々大雨淫霖の後は水嵩増りて、高岸をも衝崩し、兩涯とも漸々に河瀬廣く成り行きて、南北に廣き川原の出來て、耕地は數多の年を経ても古に復るべきさまも見えざれば、當昔の村民相議りて、高地の土を掘來りて、其廣き川原を埋め、平均して耕地を起復しければ、是即古き川處なりとて、古川てふ名にや負たりけむ。○町方は、方は借字にて、町縣なるべし。大野郡小八賀郷の町縣も同かるべし。

【和訓栞】に、町は間路なるべし、或は區をよめり、【日本紀】に十段爲町云云、今邑里城市通て六十歩を町と云。

○古事記傳 廿九卷、延喜大縣小縣條下云、縣を阿賀多と云ふは、上り田にて元は畠のことなり云云。水のつかぬを畠とも上田とも云、水田よりは高く上りたる由なり。【神代卷】高田、【萬葉】二に、上爾種蒔など有云云。上卷八千矛神の御歌に、夜麻賀多爾、麻岐斯阿多泥都岐、云云、下卷高津宮段大御歌に、夜麻賀多爾、麻祁流阿袁那母云云等ある夜麻賀多

は、山阿賀多の謂なるに、求し茜、蒔る青菜などあるを以て、山なる島なることを知るべし。地名、河内に大縣、美濃に方縣・山縣、信濃に小縣、但馬に二縣、安藝に山縣、日向に諸縣など云郡名、其の外郷里の名にも多かる、皆本は島より負る名なり。さて地名の下に附け云ふも、其の外も、上に言を連ねて言ふときの縣の唱へは、上代のは多く阿を省て賀多と云り、右に引る郡名ども、又年魚市縣、松浦縣などいふたぐひ是なり。祈年祭の祝詞に、御縣爾坐、皇神等前爾白、高市葛木十市志貴山邊會布登、御名者白豆、此六御縣爾生出、甘菜辛菜乎持參來豆、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久登宣、月次祭の祝詞にも如此あり。これに甘菜・辛菜とあるを思ふべし。なほ種々の陸田物あるべきを、甘菜・辛菜とは、其中を擇出て、一つ二つを云るのみなり。と見えたり、此六御縣は、『神名式』に、竝大月次新嘗と有、又前九卷六十丁云、此六御縣は殊に近く京畿に在て、朝廷の御料ふ陸田物を作て貢進る地なるが故に、其の神を重く祭り玉ひて、かく祈年の祝詞もあるなり、か、れば縣と云ふは、もと御上田より起れる名にて、又其に准へて國々にある朝廷の御料ふ地をもいふ（上卷に佐那縣、中卷に末羅縣、『書紀』の歷朝にあまた出、又對馬の上つ縣・下つ縣など皆國々にありし縣なり。すべて縣は、陸田物

を始めて、種々の物を貢進れりし地と聞えたり。とあるを以て按に、上古の人心は甚穩にて、川添の小田にのみ稻を作りて、水利なき高地は陸田にして、陸田物をのみ作りけむ。其の作れる甘菜・辛菜（大根・蕪菁・百合・人參・牛蒡・根葱・淺葱等）を當昔の國造等、後には國守の御館、（最初成務天皇の御代に、國造大八崎命を下し玉ひし頃は、大野郡國府本府、孝德天皇の御代より、荒城郡名張郷廣瀨の國府）へ献りけむ、故町縣てふ名に負しなるべし。如此高田のみ數多ありて、水利なき村なる故に、この深川町縣にては、高田神社を川を隔て、高野村の阿賀多神社神作のと、相對へて齋祀り、隣地には是重にては、雨を掌りたまふ貴布禰神社高野守禰神を祭りしならむ。さて其の後數多の星霜を歴て、平城天皇御代大同元年の御布令に依觀察使來て教諭せられて是重と云男いそしく、上町下町とも申合相議て、奥村々を一向頼みて、廣瀨川・荒城川の水を堰上て、遙迢用水路を掘通し、水を引來て、高田を平坦に、掘下押し平均して（後世畑田成といへる）水田として、何の村も稻を十分に作りて、又々後世に成ては、水の至らぬ限もなく、悉皆水田に成し果て、終に高田や縣は、如何なる名目とも知る者なき世に變りつらむ。今世にては、上古此村の高平地にて、水田は作りかたき故に、陸田のみ作りしを以て高田神社を祀り、町縣の名に

負し義を知れる人更になし。

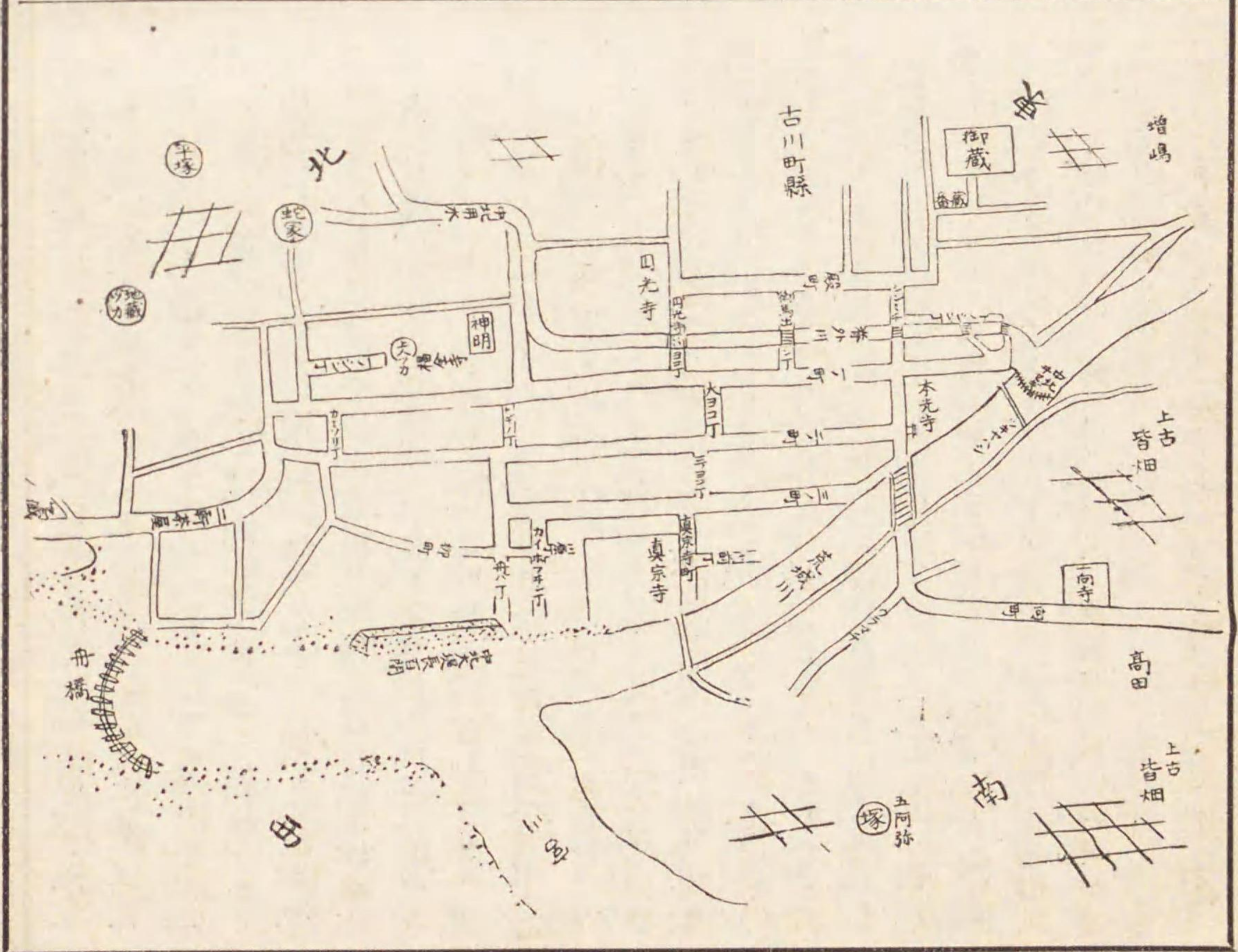
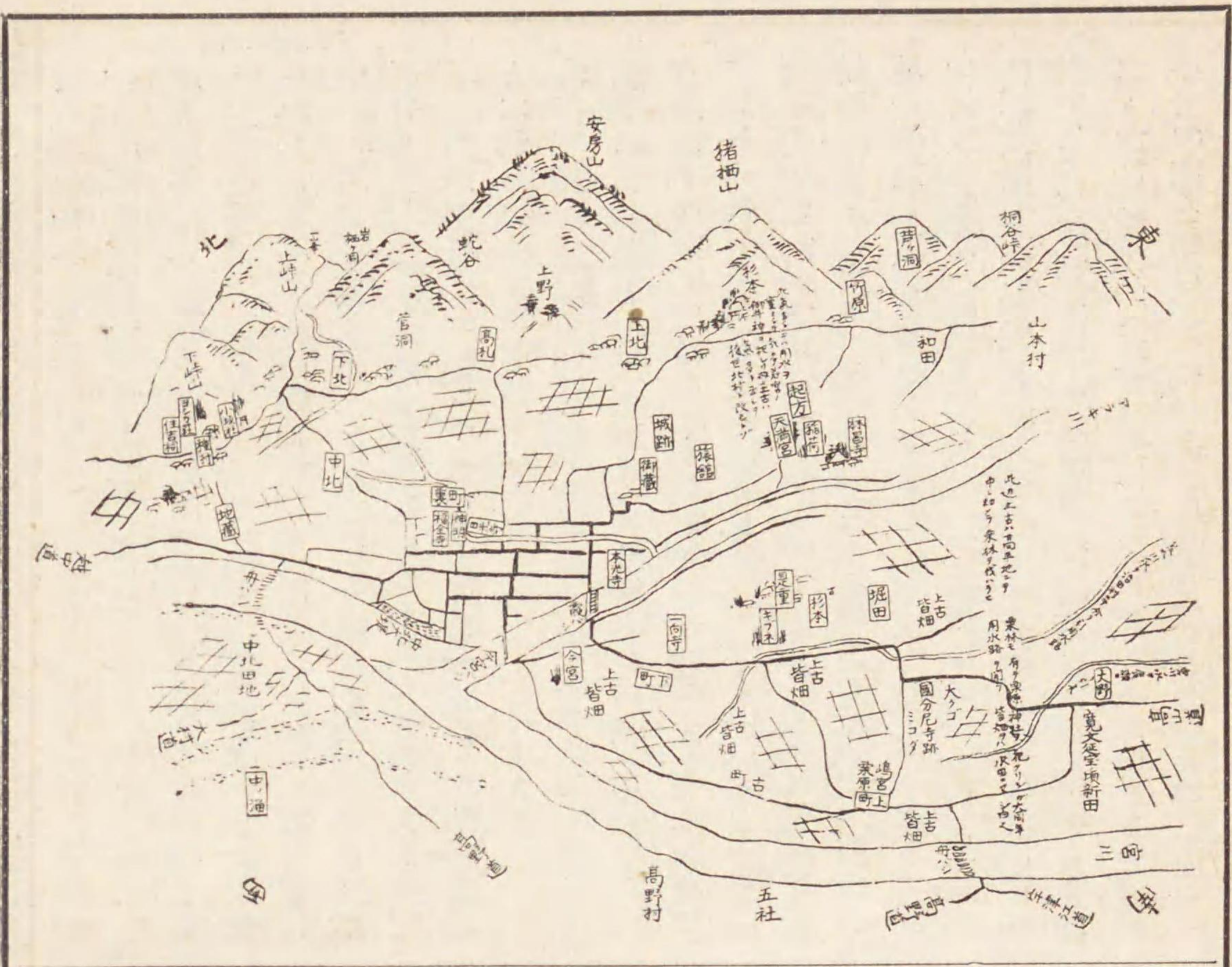
古川町は中古以來城下の市坊たりし事

應永晩年、中世國司參議藤原師言郷向小島城の出張城として、高野に古川城修築して、此の古川町を城下の市街とせられしより、寛正年中國司古川左中將の時に至て町も繁昌せり。持言朝臣を、世に古川左中將と稱せしにや、康正三年丁丑八月、五社の神鏡を鑄させられしは、此家宰にや。さて其古川左中將卒去の後は、其の城は其庶子古川二郎の居城となれり。

○古川城主 高野城古川二郎は、國司古川左中將持言朝臣の庶子にて、名乗も年代も不詳、高野村の古川城に住て、此の古川町と相對て此處を城下の市坊とせしとなり。川を隔ててなり。在城年數不詳、其後享祿四辛卯年滅亡せしとぞ。不詳○鹽屋筑前守秋貞、永祿の初年、大野郡小八賀郷町縣村尾崎城より來て、此の邊の村々を押領し、古川二郎の古城を修造して、住居せし頃も舊の如く、其の城下にて近邊の村民に諸品を代替商をして、市坊賑はひつらむ。筑前守は、其の後永祿年中、此城より坂下へ赴き、又越中新川郡へ討て出て、勝利を得て、樺尾猿倉に城を構へて諸敵と數回た、かひ、越後の上杉に屬居たりしが、天正六戊寅年、謙信卒去の虛を伺ひ、越中の諸士に猿倉城を責落され、散亡の

半途、打保村にて追兵と戦ひ、筑前守討死せしとぞ。古川城に在し妻子從卒の成行不詳、○金森法印、天正十三年乙酉八月、越前を立、諸士卒を帥て越中へ廻り、二ツ屋口より討入、高遠・松倉兩城を責落して、國中鎮定の後、鍋山城より、古川城高野に來り、在城の頃、城中に文右あるに據て、蛤蜊城と名を改られけるが、天正十七己丑年、増島に新城を築て、移られける時、古川の町家をも、盡く増島野へ引移されて、増島町と唱へしを、其の後年代不詳、舊地の古川の名を、再び唱へけるとなむ。其の舊地は、上町と下町との間に存て、田所に成て、字を古町と唱。

古川町縣枝村名義 ○上町・下町は、古しへ古川町縣の上と下とに在し故、しか唱へしを、天正年中町縣を増島野へ引き移して、舊跡は田所と變ぬれば、上町・下町てふ名も、いたづらなるやうなり。下町は今の増島町なる、古川に對へて、向町とも唱ふ。○旅館は、増島城の跡なり。金森出雲守可重朝臣の居城なりしが、其の養父素玄法印、慶長十四戊申年卒去により、可重朝臣高山城に移られて後、領主來臨ごとに、旅館とのみ稱れたり。故今にしか唱。○町裏は町縣字一人家の裏にあり。○中溜は、宮川の西に在り。元文三戊午年の洪水、中北村の田圃を押切通して、今の川脈となれり、其の時の洪水溢れて、川原に溜池となりし其一也。往古



より洪水の度毎に、溢れたる水、川原の池沼となりたる幾所も有内、上にも下にも溜池あれば、此古川町縣の地内のを、中溜と唱へしならむ。字を関口・池端など唱へ來る處有とぞ。○大野は、古しへ曠野なりしが、長大雨にて廣瀬河洪水になれば、稀には其水溢れて野に漬くことも有とて、古人は見捨地にしたりけむを、寛文末か、又は延寶の初に、懇開初めしにや。延寶八年の舊記に、殘地四五町歩も有べしと見ゆ。【元祿の檢地日切帳】に、大野新田と記たり。其頃より曠野も盡く田を墾き終へて、古の大野は、里の名にのみ残りたりとなり。

産土神高田神社跡 字高田一町三段二十八歩。神屋鋪と云ふ、穀物糞を肥に用ふれば實のらず、灰のみ用ひて作る。とぞ。當村の下町と、字古町古川町の舊地なりとの間、字高田【日本紀】神代卷の古訓をしらで、中昔よりたかだとのみ訓きつらむの神屋敷一段高地、に在。【延喜式】神名帳に出たる高田神社にて、式の傍訓は、凡て後人の書加へたるにて、據としがたし。【三代實錄】に清和天皇貞觀九年十月五日、從五位上を授かり玉ひし御神にて、本州八社中の一社に座せり。天正年中金森家の命に依て、古川町縣を増島野に引移されし時、此高田神社と是重村の杉本社とを、同時に上北村に遷坐奉て、合祭りしとなり。往古よ

(數屋神)

り祀り來りし地にて、古川町縣の名にさへ負ひたるを、殊に又神階をも進賜ひし御神の社地を輕々しく移して、合祀しとは何事ぞも、假令領主の命なりとも、國史神名式等の重事を申立、幾回も、歎き訴へて、上古のま、舊地に拜祭べきことならずや、いと淺ましき事なりけり。【往野册子】の總社考に、高田神社を隣村是重村の貴布禰社歟と書れたるは、聊行とゞかざる考なり。今二三町用水後の側に、座ませる御社にこそあれ。此の高田神社と、深河を隔て相對ひ祭りたる、高野村の阿賀多社【飛州志】に耕作の守護神と記したりとは同神にてぞ座らむ。深き由縁ますことなからむかし。○縣神社は、【式】に伊勢國鈴鹿郡、但馬國城崎郡、出雲國出雲郡等に座せり。英多神社は、遠江國濱名郡に座せり。(高田神社は丹後國加佐郡に座り、其は【神代紀】の古訓にてよむか、多加太と訓か、其の國處に就て、祭神をも傳習をも聞ざれば、何とも定めがたし。河内國澁川郡鴨高田神社、尾張國中島郡高田波蘇伎神社も、亦丹後國なるに同じ。先づ其はともあれ、古川町縣のは、村名にも負ひて、同神を高野にも相對へて拜祭れば、阿賀多神社(名張郷寒川村の縣神社と同神)にやあらむ。

増島天満宮 祭神菅原贈太政大臣英靈。祭日九月廿五日、

攝社 祭神 大己貴神・崇徳天皇御神靈。左、金刀比羅大神、右、拍子大神、里傳曰、大和國春日末社なり、毎年鹽の小苞を初穂に奉る例也。

祭神

右三社とも、五尺宛、覆桁行三間半、梁間九尺、拜殿桁行四間、梁間三間。取置、除地無之。

増島古城跡に鎮座ます菅原大神、及攝社は、昔の國守、金森家の館中に齋奉在けるを、元祿五年、出羽國上山國替の後、館荒廢して禿倉のみ残在しを、村長加藤與右衛門あらぬことに思ひて、矢倉臺今に遷奉れり。其の後宮守明星院を置いて齋奉らせけるが、程經て明星院もなく成てより、加藤代々今に怠らず、仕奉れりとぞ。○金比羅大神、【玉禰】五卷四云、象頭山別當、金光院正傳の秘書に云、元は琴平と云ふて、大物主命を祭れりしを、佛書の金毘羅神と云ふに形勢感應似たる故に、混合して金毘羅と改めたる由を記せり。此は比叡山に大宮とて、三輪大物主神を祭て在りけるに、彼の金毘羅神を混合せること、【山家要略記】に見えたるに倣へるにや。さればこそ金光院の傳書にも、出雲大社・大和三輪・日吉大宮の祭神に同じと云へり。猶此後に白峰に坐す崇徳天皇の御靈を配祭せるよし世の人普くいふは然も有りなむ。そは其の靈應

ありし事實どもを、聞きあつめ考ふるに、崇徳天皇の御稜威に、思ひ合さるゝこと多かれば、幽にむねと金毘羅の名を負ひ給ふは、此の御靈にや。然れば金毘羅と申す名こそ梵語なれ、神實はいともやごとなき神に御坐せば畏み奉るべきことにこそ。俗俗の神道者・修験者などの言に、金山彦命と云ふは、金字より思ひ付たる杜撰にて、更に謂なき妄説なり。○【古史傳】十六卷十七云、最澄法師が延暦寺を建る時に、大己貴神の七名を取て七社俗を作り、いと異なる名どもを付けて、各々本地佛をさへに付けたるが、西土天台山の守護神を、金毘羅神と云ふ由にて、大宮神を其に配して、金毘羅神とも號けたる由。【山家要略記】を始め、彼方の書に見えたり。是より大己貴神を、金毘羅神と申すこと始りて、今時めかす讚岐國の金毘羅神と云も、實は大己貴神に坐すよし、彼祠のことに記せる物に見えたり。此に就て思へば、延暦寺の中尊に樂師と云ふ佛を置きたるも、大己貴神の、病を療する方を初め玉へる、故事よりや思ひ付けむ、云云。○拍子大神を、里俗は比也宇須と唱ふるとぞ。拍子は波字之、また比也不之と社いへ、如何なる唱なれば、按に金森家は、元美濃國より近江國郡郷、金森てふ處へ移住れし由なれば、其の産土神を爰に祭られし時、神社の文字は亂世の頃な

れば、確とも訂きて、祠のみ建てられしにや。近江國野洲郡と伊香郡に兵主神社坐り、音近きまゝ、に思ひよりつ、若

さならば【神名式】に、大和國城上郡穴師坐兵主神社、(名神大月次相嘗新嘗)穴師大兵主神社【大和名所圖會】四、城上郡穴師村東弓月嵩にあり、兵主神は天孫天降坐時持たまひし鏡子鈴なりと見ゆ十三、和泉國和泉郡兵主神社、三河國加茂郡兵主神社、近江國野洲郡兵主神社、(【古史傳】六卷六云、俗には牛頭天王と云とぞ)伊香郡兵主神社、其他丹波國氷上郡、但馬國朝來郡、養父郡、氣多郡久刀寸、城崎郡三座、出石郡大生部、因幡國巨濃郡佐彌乃・許野乃、播磨國鎭磨郡射楯兵主神社二座(【古史傳】六卷九云、今廣峰に在て、此は須佐之男命、奇稻田比賣命を祀れるなるべし)多可郡兵主神社、壹岐島壹岐郡兵主神社名神などあり。○【和訓栞】中に、近江野洲郡兵主神社は、大己貴命也、尾張名古屋の城内兵主神社は、三女神を祭る、源敬公の命する所なりと云ふ(同書に、豊前宇佐に、比賣神社といふは三女神なり【續日本紀】に、比咩神と見ゆとあり)多くは素盞鳴尊なりと見えたれば、兵主神社は、國處によりて祭神異なるにや、里傳の大和國春日とあるに據て思へば、金森家の出馬に祭られたるは、武甕槌命・經津主命には坐さざる歟。鹽の小苞を毎年

獻來れる舊例、委しく聞かまほしきことになむ。

稻荷社 祭神 宇賀御魂神須佐之男命 大市比賣命 祭日 二月中の午日、社桁行八尺、梁間二間。無除地。

此の社は、増島城米倉の鎮守に請奉られしとなり。當昔の米倉は、今の官倉の一丁程南なり。古倉壘城を壞せる時、又一町許東菅原大神の傍に、遷奉りけるとなむ。○【古事記傳】九卷五に、或書に、稻荷三座は、本殿は宇賀御魂、第二殿須佐之男命、第三殿大市比賣なりと云り。○【古史傳】四卷六云、宇迦之御魂神、御紀に、倉稻魂此云宇介能美拖磨云、【式】に、山城國紀伊郡に稻荷神社三座並名神、大、月次、新嘗。とあるは、此の神を祭れる御社なり。其は【二十二社注式】に、稻荷社倉稻魂命、一名豐宇氣姬命、大和國廣瀨、伊勢外宮同體なり。元明天皇和銅四年始顯坐伊奈利山三峰、とあり、云云。増島 茂松 年毎に里のさかえも増島や、まもり久しき神垣の松

古川菅神祠堂記

飛之古川、有菅公祠、是原故保障、而其他隆崇、登之垣夷如砥、里正藤氏奉事菅神、創構堂而奠焉、堂前種以松與梅、蓋諸菅公嘗所愛也、大凡草木之生々乎天壤之間、其可愛者不一而足、然古之人各殊其所愛者、蓋有其心之所取而

存也、奚翹愛之而已邪、由是觀之古人之愛草木不翹也、今也藤氏所諸菅公嘗所愛而種焉、不知固能知菅公愛之之心歟、抑將不然歟、苟知種之、則必有知菅公愛之之心也、然則使士女謂者視其所種、則知菅公嘗愛之、知菅公嘗愛之、則亦必有知菅公愛之之心而思慕焉、是以視其松、則思其忠節、視其梅、則思其文章、思慕不已、則遂化于其忠節文章也必矣、藤氏種之不亦深乎、祠堂歐位面西南、沃野盤旋焉、猷擊自峰巒之秀、采繁於溪澗之清、山也水也、蒼々淙々、宛然李思訓之所描、豈管飛之一勝景也哉、藤氏求記、於是乎書

延享甲子秋九月

櫛陽僧廬雲憲榮

増島山明星院眞言宗、能登國天平寺末開基年代不詳、無餘地、無住、増島城廢絶の後、天満宮を矢倉跡へ遷し奉り、宮守に此の明星院を置きしとなり、能登國石動山天平寺よりの、院號と山號免許の書二通今に遺れり。

院號免許之事

云

奉花押

寛延二年十一月十二日

明星院御房

山號免許之事

云

上同

寛延三年九月二十日

宛上同

寛長年中金森出雲守建立並除地
神明宮 在町裏銀杏岡。祭神天照大御神。祭日六月十六日。宮地三畝十五步、社桁行一丈、梁間二間三尺。境内二畝五步、福全密寺。高五斗三升七合、此段別畑七畝二十步。境外元祿七甲戌年檢地名受實寶院。同十二巳卯年、除地。里傳に、銀杏岡に齋奉れる大神は、何れの御代より鎮座ましましけむ、其の本源は慥なる傳への残らねば知らざれど、其遠き世より座ましけむを。亂世の打ち續きて甚大く荒まして、銀杏の大樹の本に、小さき禿倉のみ遣り座しけるを、其の後福全寺に隣れるを以て、彼寺より齋き奉りけるが、寺もや、衰へ主の法師なく成てより、村長議りて、村の長民等三人づゝ、毎年かはりく仕へ奉れり。何れの御代より鎮座ましけむとあれど、其は元祿檢地帳にもあるべし。【寶曆除地帳】に、慶長年中、金森出雲守建立、除地と記たるは、實寶院のことか。抑古川町縣を天正の末に、此増島野へ引移つる由なれば、天正以前に、野中に神明宮を祭りたらむこといかゞに思はる。又神明宮を、今般書上に、伊勢兩宮と記したるも、亦いかゞにあらむ。村民の考に、此大神こそ道後神に坐ましけめ。【總社考】云、みちのしりと訓むべきか、【記傳】に大雀命

の御歌に、美知能斯理、古波陀袁登賣袁、云とあるみちのしりは道之後也、日向は筑紫の南の極なるが故なり。又伊勢國にては、度會・多氣・飯野三郡を、道後と云、彼三郡は、伊勢の南の極にて、京より下る道後なればなりとあり。是をもて思へば、此の道後も、高原郷・小鷹利郷などの最北にあるべく、思はるとあるに據て、【古事記】と【和訓栞】とを引て、本州にては、益田郡は道口、吉城郡は道後なり、奥飛騨廣瀬・荒城・古川三郷の内にては、此の邊北の方にて、古しへの古川古川より、よりは最道後なり。今の古川(天正の末より町縣村)にても、北の極に坐して町後なれば、此社を道後と云ふことは疑なかるべし。(是は【總社考】の小鷹利の最北とあるに泥みたる考なるべし)○明治九年三月、古川町より【村誌】書上の時、神山和介・佐藤彦太郎外：人連名調印にて道後シテは、町尻マテと音通、マ・ミは共に美稱にて古川の神明宮、其に能く當れるを、【後風土記】に擯斥して、阿多野郷なりと云り。彼地は信濃より入來る口こそあれ、後には非すと云る由なり。只益田郡を道の口、吉城郡を道後と云、荏野翁の考に泥みての僻論なり。手を拍て笑ふべし。清和天皇貞觀九年十月、飛驒國道後神に従五位下を授けたまへり。七百：年後、金森侯増島に新城を築かれたるは、天正十七年

の由なり。其の後増島野へ古川町を引れたる由なり。未來を察して、往古貞觀九年に、加階したまふべきやは。○按に此考、【記傳】の外は僻説なるべし。抑本州にて、國の眞秀と云、中央と云へば、今の高山と古川と成るべし(蛇の目の紋にたとへていはば、古川は正中はいささかよきたれど、中輪の内と云ふべし)高山は近郷土地の打辟けたること、南は石浦、北は三枝郷まで、纔に二里なり、三六古川は隣郷まで、田野廣寬平坦なること、東は宮地より、西は野口まで、五里に餘れり、遠き眺望は國中にならびなし、殊に肥壤膏腴にて、稻穀の生長、收穫の豊饒は、大野郡の田圃に倍なるべし。其眞秀處、道程國の央に座る神を、何にして道後神とはいはむ、此越中道にては、文道寺嶺の邊ならば、道後の道理にも當らんか、然れとも此の道は、美濃國より商人の越中に通ふ私の間道と云ふべからむ。故熟思ふに古の御制の東山道の順道は、近江・美濃・飛驒・信濃と云ふこと、今の世に至るまで、皆能く人の知る所なり。按察使(元正天皇の養老三十七年七月始め玉へり)鎮撫使(聖武天皇の天平三年十一月始め玉へり)巡察使(廢帝天平寶字二年十月の勅旨)觀察使(平城天皇大同二年五月始め玉ひよしなり)其の他の官使巡行の、官道の後てふ義ならむ。【續記】卷第二十

(山後道)

三御紀、云、天平寶字五年春正月云壬寅、從四位上藤原惠美朝臣眞光神興、爲兼美濃・飛驒・信濃按察使とあれば、巡行の時は、本州の國に來り、越中へはゆかて、直に信濃國へ通たりけむ。凡て東山道の官使は、皆しかるべし。さて信濃へ越る官道の險難嶺の數多ある内は、就中檜皮と野麥の兩の嶺は殊に甚し、其等を安穩にとて、(日本武尊の東征の時の御事など、想像し奉るに)官道を守らせませす神社をこそ、道後神とは稱し奉るべけれ。されば信濃國界に近き、益田郡阿多野郷、奥山中の官道の傍に、今も道後山と云ふ大山有て、道後溪と云急流の谷川もあり、其の上に坐す神社こそ、上古よりの道後神にて御座ますらめ。【總社考】の道後の考は、東山道の順道に心附かさる僻説なり。北陸道にては、越前、こしのみちのくち、越後、こしのみちのしり、山陽道にては、備前、きびのみちのくち、備後、きびのみちのしり、其他何國にても、京より來て初の處は道のくち、終の方は道のしりと云ふ例なり。戒尊山福全密寺 七日町村、國分寺末。眞言宗、開闢年代未詳。【除地帳】には慶長年中とあり。本尊阿彌陀如來。左弘法大師木像、右古佛木像、境内竝境外除地畑とも前の神明宮條内に記。里傳に、往古開闢年代不詳。荒廢たりしを天正年中、中興

第一世快存と云ふ僧、諸國修行して古川に來り、金森可重朝臣に城中にて謁、僧の貴相を惟み、屢俗姓を問はれしかど、顯白ざりしが、圍碁の興に乘し、鷹司家の連技の由、聞えけるに依、尊敬有て引留、舊院を再建て、境内外を寄附し、除地にせられしとなり。儲快存は、寛永十年寂二世海龍、三世天學等、元祿の初まで、眞言の法流たり。其の後修驗來休住て、實寶院と改め、元祿の檢地を受け、境の内外除地となりぬ、次に堯秀、安永年中まで住て、信濃國へ轉任の後衰廢に及ひしを、古川町玉腰某修覆して、天保六年高山町縣國分寺末寺と成、僧侶交代して、寺役を務來れり。近來玉腰正文、村長加藤締寛とはかりて、市中年番を立、修理等、怠らずすることになりぬとぞ。什物 護摩具數品 錫杖一柄、笈一具、表以鍍金平金具包之。快存行脚所負、茶碗一箇、快存の古墳の側なる土中より掘出す、尤古物なり。上人塚 境外に有、里俗上人塚と稱、即快存師の塚なり。庚申堂一字 祭神猿田彦神、右境内に座せり。【日本紀略】第二卷云、朱雀天皇天慶二己亥年、七月二十二日庚申、内裡有庚申御遊、侍臣獻和歌、と有、是ぞ禁中にての始めなるべき。【古今著聞集】に、天曆七年、内裡にて庚申の御遊とも記ゆ、【後拾遺集】秋の上に、七月七日、

庚申にあたりて侍けるをよめる。

大江佐經

いとどしく露けかららん七夕の、寝ぬ夜にあへる

天の羽衣

【東鑑】に庚申の夜、和歌御會、被守庚申とあるを【和訓栞】に、遊といひ守と云ふは、西土三尸を伏する妄誕に似たり。白樂天、守川尸の詩あり、菅公の庚申詩もあれば、古くより有りしことなるべし。【拾芥抄】【袋草紙】にも出。【三才圖會】には、宇多帝・醍醐帝の朝、専ら是を行ふとあり、さもあるべし。浮屠家、青面金剛夜叉を祭るものも亦謬れり、云、源順が庚申夜奉和歌小序に、掛まくもかしきこき御神、あはれとも、恵みさいはひ給てむ。また【朗詠集】に庚申歌に、

源 順

沖中のゑざるかたなき釣舟は、あまや先だつ魚や
先だつ

か、れば我邦にては猿田彦大神を祭るも、いと古たり。沖中の得ざる方なき釣舟とは、【神代紀】云、居天八達之衢奉迎の意にして、翁庚申名を隠せり。海人や先立魚や先立とは、汝將先我行乎、抑我先汝行乎の意にて、先達指導の義、又待といふも、猿田彦大神に出たり。【下猶栞】に

くはし。【古事記傳】此神の註には、用ひられざれども、古くより言來れることなるべし。かくある如く、此大神は先達指導の大神にし座せば、同境内に祭れる大神を、いかにして道後神と稱すべき謂あらむ。

栗原社 在上町字大供御。祭神不詳。祭日、境内、除地無之。里傳曰、上町之内字大供御、異名くははらと訛り來れる所、クリハラの記をク、凡そ五六段歩の地なり。往昔此處に栗原神社座ましける舊地にて、古川城の麓に式内八座の内、吉城郡の五社を、集へ祭られし時、栗原神社を遷し奉りて、外の四柱御靈實を相殿に請奉り、古川五社と稱奉れり。あはれ其の頃までは、何れの御社は何方と、所等の違ふべうもなかりけむを、亂世の紛れに、たふとき御社も世に知られ玉はず、移替り來りしに、此栗原は小社の坐しましけるが幸にて、栗原の本御社なることは、傳に残りけるにより、過し年頃、吉田殿の御玉串をも請そへ、今は田の中なればなりとて、島宮御旅所へ遷奉、相殿に齋祭り來れり。○按に、里傳はいと鄙俗語なれども、傳の如く、上町には上世栗原在て、村民其の粟子を拾ひ取て國宰に獻りしを、國宰又其を朝廷へ奉られしこともや有つらむ。(仁明天皇天長十年八月、本州より貢し松實御贄の如く) 觀覽まし、供御にめされしこともや有りつべし。さ

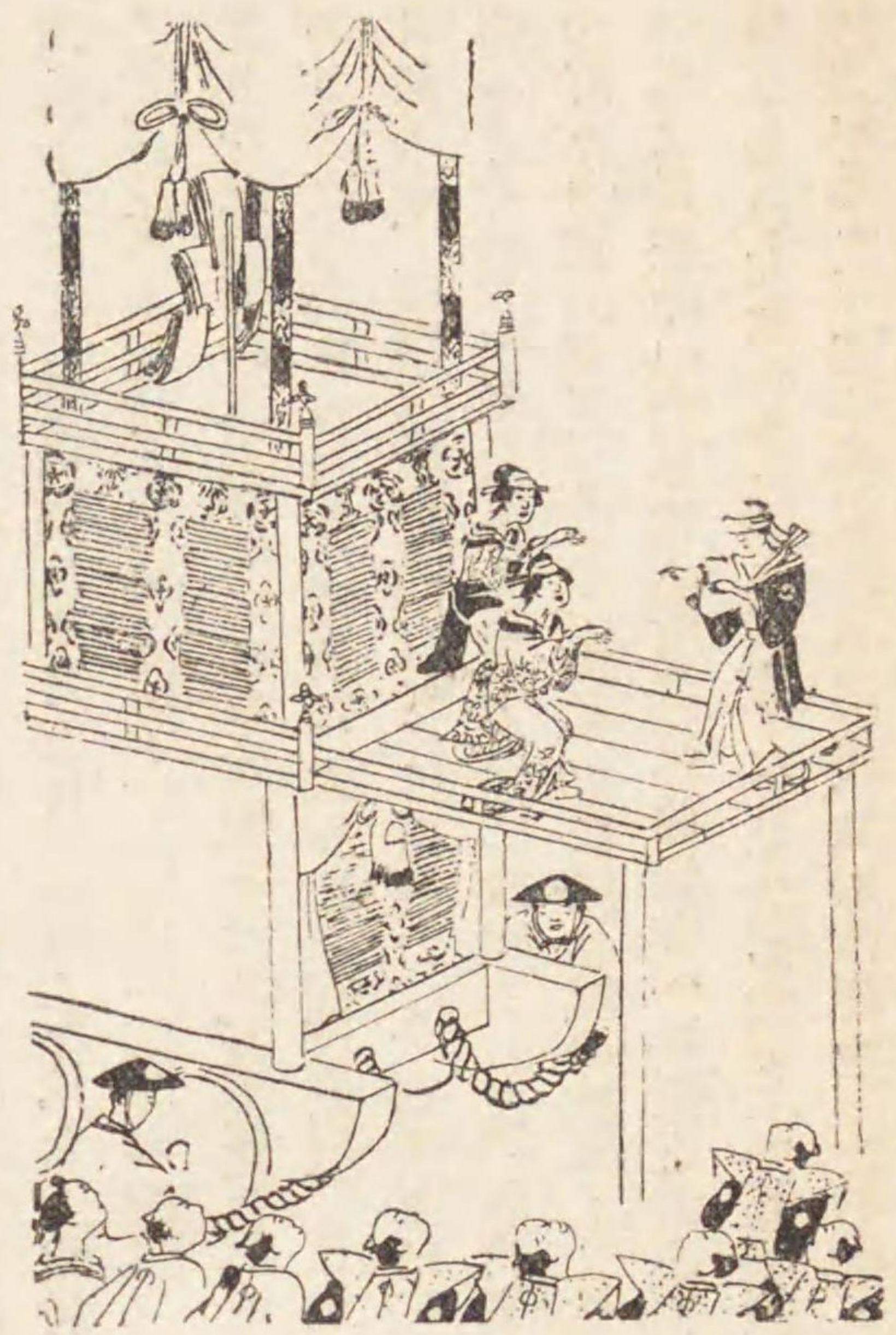
る旨を國宰より諭しけるを、上町の村長甚だ悦て、其の栗林の在所を、其字大供御と稱へて、嚴重に守りて、栗子の實りし年毎に、拾ひ取て奉獻り、其地に神社をも建て祭りつらむ。(今世山中の木地師等が山神を祭れる如く、甚淺はかなる小祠にや在らむ)其は上町こそあれ、地續なる是重・古川町縣・下町等にては、田の水を引かむと欲しても、彼栗原に灌溉の要地を塞がれ、大供御てふ名に懼れて、爲方なく、徒然に高田をのみ作りて星霜を送りけむ。さても有るべきことにもあらず、水乏かりければ、是重村には高靈^{高靈}神を祭り、古川町縣には、高田神社を齋き祭りて、甘雨をのみ祈り、其をたのみて、陸田子をそ作りて、年月を送りつらむ。【日本後紀】卷十四^{天武}云、大同元年五月丁亥、始置六道觀祭使、六月癸巳朔、山陽道觀祭使正四位下藤原朝臣園人言云、是日勅、池之爲用、必由灌溉、栗林之用、良爲得實、今諸國所有、蓮池並栗林等、或決灌田之水、潤彼芙蓉、或占无實之林、寄言供御、如此之類、必妨百姓、宜遣使子細勘定之、とは實に然るべきことなりけり。凡て山中に住める村家は、田畑少く、穀物乏しき故、據なく山林の栗子其の外を便とし、其を拾收て食物の助とこそ爲らめ、如此國の中央眞府に住て、稻穀數多收獲べき地を、懇開しもせで、栗林をもて世の

嘲弄せられんとは、愚昧の至りと云ふべからむ。如此所諸國に在し故に、勅旨や有りつらむ。さて其より後は、爲方なく栗林を伐り拂ひて、栗原神を祭る人もなく成つらむ。其の跡は漸々に、栗の株も根も、朽ち行を堀捨て、新田を切開き、初めて灌溉の要路を堀徹して、凡て水田とし、後には是重も、町縣も、下町も、其の餘水に便て、高田を水田^{水田}にや爲つらむ。されば大同元年より百餘年經て後【延喜式】は撰上になりぬ。上町の栗原神は、舊の栗原は田になりて百餘年後なれば、奏達せらるへき理なければ、【神名帳】の栗原神社は、遊遊郷^{高靈}の數十ヶ村にて祭れる宮原村なる栗原神社なるべし、(今の高原なれば、【延喜式】の郷村神社の列位も的當、又宮原の村名も神社に據り、字も栗原と云、支村に神名田^{今云}あり、毎年五月梅雨中の祭禮を執り行ふて、俗に栗花落祭(ツユリマツリ)と唱ふこと、古より今にかはらず)確證もあまたあれば、決て其ならむ。彼高原郷村々は古來栗子は佳味にて國中ならびなし。搗栗を數多製、國中は更なり、諸國へ賣出して、飛驒國名まで知られ、夫食に用ひたる餘りを、生栗・乾栗まで、多く賣出し、其等の價を以て、貢金をも納むるほどの村々なれば、延喜年中の國宰も、一郷一社を書出されし内に、彼郷は村々専ら栗子を以て、(若木を

能く育て、栗子を拾、老木は伐て批て、栗小板にして、賣出して、活計とする故に、其の栗原神社を撰て奏達せられたるが、【神名式】にや載せられつらむ。○上町の里傳の、古川五社勸請の事は、遙に後世の國司家の頃の里傳と、往古大同年中より、上世の事と混雜とや申べからむ。今宮 社桁行二間三尺、梁間同。在下町。祭神不詳。祭日八月十日。境内除地無之。村抱の地に鎮座。里傳曰、京の今宮を祭るならむといへり。されば戸寺村なる今宮は、惟喬親王を祭れり。又高野村の五社の別靈なりともいへり。鎮座來由年代不詳。

産土神杉本社 在上北村。祭神、氏子、古川、町縣、旅館、中溜・町裏・下町。社傳、祭日八月五日・六日・七日。右上北村に記。氏子、上北村・同起方・山本村内和田。御神事^{毎月八日}五日を試樂といふ、御祭の日を本樂と云ふ。屋臺を引、其のさま高山の日吉祭・八幡祭に大方同じ。御祭の一日・二日前より、町内大路小路の口々に幡をたて、其の下に燈明をともし、松をたて、注連引はへ、試樂の日は、各自其の町々を彼の屋臺を引て、己が町に歸り試の藝をし。其の藝は屋臺の中壇と云ふ所より、前の方へ踊臺と云ふ物をさし出し、其の上にて俳優すなり、其を踊と云。其の躍は、年々にかへて、歌舞伎の可笑、興ある所を、少しづつ、

ぬき出てすなり。其の躍子はみな十歳ばかりなる童部なり。さて本樂の日は、曉より太鼓うち鳴し町々を巡る、是を起し大鼓と云ふ。ほのふ、明けわたる頃、神輿を昇荷ひ奉り、上北村より起方、旅館を廻りて、(古金森家の館の在し時よりの例なり)古川町に出し奉り、神輿旅所に入玉ひて、屋臺は其の先に、町々より引揃て待居、やがてかの踊を初む、木偶をおどらすもあり。屋臺を引次第は、初めに三番叟、次は年々かはれり、更りて末になるを、年行司と云て、御祭の事は、凡て掌て指揮す、前日に高山廳より、官吏二人、役屋に來て、非常をいましむ。^{是を奉行}本樂の朝、其の前を始にて、町々を引きありき、日の暮れたる時は、屋臺に透間もなく、挑燈ともし列ねて、引終れる町より、己が町々へ歸る、是を引別れと云ふ。神輿は、村の長等、麻の上下衣着よそひて、前後左右を圍み、四つの御幡神など持せ、其の御前を、獅子の頭をかぶり、笛・太鼓・すりかね等に、拍子をあはせ舞步行、こは上北村の若男ども勤るなり。社人は跡へ仕へ奉り、町々を廻りて、東岡にかへり玉ふ、御迎も、御送も、町長等仕奉れり、大路の塵うち拂ひ清めて、盛砂布土ものして、水桶に水を湛へ、家ごとに飾りたり。火鎮の役は、晝夜かはるがはる、町中を廻り、其の長は陣笠をかぶり、羽織を著、供に抄團扇、



鳶口・張手桶など、火を防ぐ具とも、もたせて歩行さ
いと厳猛し。五日の夜より、家毎に、燃燈か、け、六日の
夜も同じく燈し列ねたるは、いと端麗しうなむ、さて官
吏は夜に入て、杉本社に詣でて、七日の朝高山へ歸りぬ、
其の日古川の町々より、御社へ男女うち連て詣ること、
毎年賑やかなり。

屋臺名目
三番叟臺一之町上丁
鳳凰臺一之町二丁
清曜臺三之町
金龜臺二之町三丁
白虎臺三之町
麒麟臺一之町
龍笛臺二之町
朱雀臺向町
青龍臺殿町
三光臺二之町
朱雀臺向町

明治三午年の順次なり。三番叟の外、屋臺の早く出来し
順に連れり。年々未なるが年行司と云、祭事を掌り執行
へり。翌年は三番叟の次なるが、年行司となる例なりと
ぞ。

本光教寺 西本願寺末、永祿三庚申歲道場開基、慶長八年號
本光寺、其後號白豹山。本尊阿彌陀如來、境内一段九畝四
步、元祿七甲戌年檢地名受、本光寺。同十二己卯年除地。
外も、田畑高二石二斗八升、此段別二段二畝十步、境外。寺
傳云、開基始祖教了俗名を山下嘉一郎と云、白川牧戸城
主(後に保木脇城に移居)内島將監爲氏の家臣、山下市右
衛門の次男にて、母は爲氏の妹、上野介雅氏の嫡なり。嘉
一郎は勇猛の若士たりしが、無常を觀じ、中野照蓮寺明
心の勤化に歸依して、剃髮名を教了と改む。照蓮寺了教
の代に至り、古川下町に草庵を結び、教了を居らしむ。天
文十九年三月五日寂す。二代了惠、天正十七年古町より
古川を増島に移されし時、僧房を速に移轉に依て、金森
可重朝臣より、松材百本寄附せらる。三代了賢(實高山眞
蓮寺圓乘の三男なり)慶長八年(「岷江記」に見ゆ)教如
師より、寺號本光寺を許さる。元和三年金森重頼朝臣よ
り、除地一石六斗餘寄附(田畠二石二斗八升の内か、不
詳)五代了智、山本村にて土中より掘出せし、木佛一軀を

懇望して本尊とす。七代了誓、寶永三年東本願寺の末を
離れ、西本願寺に歸す。舊説云、彼木佛は、安房山清峰寺
奥院の舊本尊にて、聖德太子の所作なりと云へることを
聞て、寂如師其の裡書を與へられぬ。八代了信、本堂再建
延享五年上棟。○按に、本光寺は始祖教了より代々照蓮
寺隨一の法門たり。然るに七代了誓西本願寺へ轉隨の來
由は、「岷江記」に著明し、照蓮寺三世宣心論議は、國主金
森重頼朝臣の三男にて。本願寺宣如師の女云云を娶り、男
子を生、其を照蓮寺四世琢情と云、情作情元祿五年金森
家は、出羽國上山へ移されて後、照蓮寺閨房亂れ、琢情及
其の子一乗とも女色に耽り、寺務を怠れるに依て、元祿
十二年正月、本光寺圓德寺等、本山に訴へ、琢情を退隱せ
しめ、一乘に寺を譲らしめんとせしに、同年三月、本山よ
り使僧使者來りて糺明し、琢情を松本村松亭へ退け、一
乘に寺をつがしめ、二十五口米を給、父の借財四百金を
償はしむ。一乘其の命に隨ふこと能はず、其の半を減さ
むことを本山へ願へども免されず、元祿十六年終に照蓮
寺務を本山へ委す、本光寺等切りに諫め歎訴れとも、救
ふこと能はず、是に因て照蓮寺は輪住と成りぬ。(翌十七
年、一乘は京師の湯女と情死せしとそ。本光寺了誓等は、
仰天歎息して退きぬとそ。其の後(「岷江記」には寶永二

年)東本願寺下を離れて、西本願寺に歸伏せしとなり。
○本尊裡書 方便法身尊形、本願寺釋蓮如在判、文明十
七年乙巳十一月二十八日、飛驒國白川善俊門徒、美濃國
郡上郡奈良谷願主釋圓實、○應仁亂後、大野郡榎谷村大
原村より、川下、益田郡馬瀬郷不殘、美濃國の土に奪ひ侵
されて、美濃國と唱へたりしを、永正十五年戊寅年、三木
直頼取り返して、古に復しぬ。○「岷江記」を按するに、文
龜元年、本願寺實如師より、白川照蓮寺十一世了教へ與
へられし本尊を、本光寺開基教了へ渡し置きたるを、高
山照蓮寺二世宣了請ひ返しけるを、本光寺四世意賢、迷
惑がりしに依て、榎谷寺圓實へ蓮如師より與へられしを
其の代に取かへけるとなり。意賢是非なくかへて本尊と
せしとなり。榎谷寺は圓實が玄孫圓宗が代に、凶年に逢
て榎谷寺を捨て、美濃國郡上郡栗野村へ行て、飢を凌ぎ
居て、其處にて死たりとぞ。其を照蓮寺聞て、本尊を請ひ
て安置たりしを、宣了より意賢へ遣けるとなり。
○本尊木佛裡書 木佛尊像、釋寂如在判、寶永三年丙戌
九月廿日、飛驒國吉城郡古川村、本光寺什物願主釋了誓、
詳記。○梵鐘銘 雖設六塵說、昭心在一聞、犯霜晝夜月、鐘
曉破魔軍、妙角云何測、法輪日々殷、乾坤運々響、所到普
於雲。寶永十四申三月。

眞宗教寺 西本願寺末、天文十一年、從白川菰町移住、天正
晚年改號眞宗寺、其後號三島山。本尊阿彌陀如來。境內三
段九畝五步。田畑高七斗九升五合、境外。此段別七畝二十
六步。元祿七甲戌年檢地名受、眞宗寺。同十二己卯年境內
外除地。

【寺傳】云、享德年間、開基始祖祐念は、白川照蓮寺八世明
誓の弟子と成り、除髮して明林坊祐念と號、大野郡白川
郷菰町村字朝戸開と云ふ所に、道場を建て明林房と號す。
二世明空、天文十一年菰町より吉城郡古川下町に移住、
【岷江記】に古川妙林坊追寺のこと見ゆ、三世明祐が年
代とも詳ならず。四世了安(照蓮寺八世明誓二男、眞蓮寺
開基、三島將監入道教信玄孫、圓乘長男也。(明誓二男は
長男なり)に至り、教如師より眞宗寺と寺號を與へらる。
天文十七年、金森氏古川を増島野に引地の時、堂宇を即
時に移せしに依て、金森家褒賞ありて、材木五十本、板百
枚を賜ふ。五世了圓、教如師より木佛安置を免さる。八世
了心寶永三年、東本願寺末を離れ西本願寺に歸伏、(本光
寺と同意にて、照蓮寺一乘の事に依てなり。且席順は家
門なりとて、眞宗寺・一老眞蓮寺・本光寺・二老專念寺と
定めたるを、掛所に成て、古川二寺を次座にし、且役銀の
ことに就て、古川二寺は、西本願寺に屬せしとなり。飛擔

の方便は、【岷江記】に詳なれば、爰に略す。寂如師、本尊の
裡書を改め與へられき。十一世了寬、本堂再建、梵鐘鑄造。
○【岷江記】を按に、古川の妙林坊は、照蓮寺善了より明
了後號を師とし仕へたりしが、偶等安が意にそむき、金
森家に放逐されて、越中へ遁れりとぞ。妙林坊の明跡を、
眞蓮寺一男了安住持し、眞蓮寺は二男惠圓つげり。

○本尊裡書 方便法身尊形、大谷本願寺實如在判、文龜
二壬戌年十二月十八日、飛驒國白川門徒、美濃國郡上郡
氣良庄、正保寺願主釋淨善、とあり。此眞宗寺へ傳來の事
は不詳。○本尊木佛裡書 木佛尊形、釋寂如在判、寶永三
歲丙戌九月二十日、飛驒國吉城郡古川眞宗寺什物、願主
釋了心。

○鐘銘 發無何有、瀏韻其清、遠啓幽蟄、宜誇大鳴、一杵
人覺、三鐘魔驚、遐邇聞々、利物非輕、順古佛製、笱簾體
成、清長童稚、定聽妙聲、元文五年庚申九月十四日飛州吉
城郡古川眞宗寺、願主中村善右衛門同諸檀中、治工京洛
三條釜座、和田信濃大掾藤原國次。

○馬具 鞍・鐙・鞞・轡、故候金森氏所賜。

○寺内堂宇 本堂・經藏・鐘樓・鼓樓門、(増島城門を移し
て建つ)庫裡。水鉢、號龍淵石、高七尺餘、長九尺七寸、横
六尺、容水二斛七斗五升。文化五戊辰歲、從袈裟丸村河中

挽移之。尾張龍田新田人、平安住龍田中野煥通稱記あり、
文長き故略之。(下に全文を載せたり)

龍淵石記

飛州古川眞宗寺老上人曰高勇、性慈而行愈勤、識明而言愈
信、爲其檀越者、不下千家矣、上人曰講法不怠、檀信愈深、寺之
右方、一條長川、北流入越、所謂古川即是、其下流西北十許
里、有村曰袈裟丸、川中一大石、巍然盤乎水中、石頂汗而爲
窟、如小池、周回可三丈、天造自然人皆以稱奇、獨余之遊飛州
也、知上人有致是大石之志焉、今茲九月、上來人京師、訪余
一語卒然及大石、曰、石遂移之、然未有名焉、今故來請、願爲
名並記、乃手圖其形容、以說移石一事、甚詳且盡矣、其言曰、先
是寬政八年春、大江村檀越宇右衛門者、來告曰、袈裟丸村大
石、天質雄偉、希有之物、如能驅之、以寘寺院正面、常貯清泉
數斛、永供盥漱之用、不亦一快乎、然任重而川險、不如姑俟
其時計之、已閱十有二年、以迄文化五年、邑人有以荒木爲屋
號者、父稱久右衛門、男稱久藏、父子將爲唱首、以謀諸貧道、
々々熟慮之曰、後三年辛未歲、則吾高祖親鸞上人、五百五十
年回忌辰、將先是庚午歲、追遠以會同社、移石在其前、則幸
甚矣、於是久藏等、與同志會議、遍告十方、廣募善緣、七月四
日、村々丁壯、不拘宗流、應募來者、不下千人矣、雜然會聚、父老
以爲、古有運重之法、雖然今阻以川險、豈可以尋常稱象鉤牛

之術施之哉、乃多斫大木、先連大木五章藤葛編之、以爲石下
床、床有首尾、使首上向、削其下端如舟首、使不觸土塊、又合
草索數十、製大繩八條、繩大一圍半、每繩繫以衆繩、一繩可
以供百人以上矣、乃以巨材起重、則有法有機、大石始動搖、
宛有點頭之狀、而後傾之倒之、下其石頂百方載之、人々拮据
綱繆、纏絡牢固、縛床隨其所行、橫大木數十、櫛比爲道、以運
其上、輪轉助輓力、乘其機會以牽之、自四日至七日、每日擊
鼓會衆、轉運之設略備、執繩村丁、或三百、或四百、以試之不
動、漸增至五百六百、而猶不動、千人一齊、打號牽之、一運數
步、石中有聲、聞于十里矣、蓋石頂下頓風響乎其窟中、偶吐怒
號之氣而然者歟、又每牽引、木口、液汁迸出、如霧雨、亦用生
木故歟、比及薄暮、纔得及陸也、八日又擊鼓會衆、凡運移之
間、朝々擊鼓、莫不應者、此日移及原田野、僅可二百步、九日及
高瀨下流、十日及其上流、于時節逼中元、不會衆徒十日、既
經十日之間、石床陷乎沙石中者可二尺、廿一日穿沙石起床、
運于川中、二十二日將移上岸、不動而休、凡移石之間、雨七
日、里人傳言、大石窟中、古昔蛟龍之所蟄蟠、今猶有靈、致雨
者歟、廿四日潦水滿大石、休四日、遂移之於陸、々行及上野、
又將及川而止、是夜遽製麻索爲繩、以代草索、以其激水而牽、
大繩屢斷、力不堪也、廿九日及平六瀨、八月朔比及于陸、跌乎
道傍、陷滯于小川中、石與床殆齟齬、竭力補救之、二日爲運

行險故、借道於新墾田中而運之、凡一日之運、自二三百步、至四五百步、其最多、不過一里半許耳、三日申牌、及寺院後門外津中、此則古川高山川、所合流之處、其深垂二丈、此時遠近村々、來觀者蓋可二萬人、自寺院中、及門外、滿巷連津、蹂躪壓倒、其勢可以敵大石也、丁壯緝之、或陸或水、水陸戮力、力比金剛、氣陵五丁、奔流迅激、盤渦旋轉、轟如雷霆、颯捲波瀾、其出水也、巨象躡身、其衝岸也、怒貌作威、踴躍一跳、突兀在陸、萬人一心、齊發聲音、人天震動、實如有佛力威神助之者、而然亦可以稱一大快矣、其轉移之爲苦也、川則避險、陸則避田、伐除榛奔、登降原野、逶迤曲折、迂隆不一、雖僅僅十許里間、其程或倍蓰之、今也得其歡心、而將移于寺中則、老幼男女、欲齊結勝緣、與其援引、以爲隨喜、輒增繩索、人々纏屬、於是丁夫、緩其打號、謳歌前導、徐々引之、自後門外至寺前、既毀門牆、伐林木則、無復險處、反不願其亟行、自酉及戌後、此日檀頭、荒木中村氏、及其餘檀越、各以樽酒祝之、酒若干斛、以勞大衆、豈能及醉、人々欣然、潤脣而去、佛殿正面、有櫟樹一株、柯葉扶疎、形如幄幕、其大小與石稱焉、今寘大石於其下、則宛然爲之蓋、如有待而然、石高七尺餘、長九尺七寸、橫六尺、容水二石七斗五升、其度量以此土製云、石色黝然、面々如削成、上下無潤狹、但前面近上有凹處、亦成山谷狀、余曰、既聞其詳如此、則有可記者、有可名者、彼里人之

一言、其可以名者也、夫龍之爲物、大小變化難測、大石池中、其蟄蟠處、可以爲淵者、乃以龍淵名石、其誰謂不可、且在周易、則有良象、爲石者、又以象雲、後人名雲根、亦有由也、又按荊州記、有陰陽二石、鞭陽石則晴、繇此觀之、石本靈物、龍能致雲雨、石亦有雲雨驗、其亦可以龍名焉者如此、顧如唐宋李米二氏之於石也、最其昭々者、或傳子孫以爲榮、或衣冠拜之、此豈免玩物喪志之罪者哉、今上人之於石也、其見卓然、能割私愛、而供佛祖、尊崇佛祖、以視衆生、衆生有涯、石屬不朽、壽之鴻算、與佛之無量類者、非此石歟、況此本在袈裟丸、亦似乎有良緣、而現其瑞相者矣、乃以爲拜具、其爲功德、亦未可測也、且上人有言曰、我志願經一紀之久、而今及之、然吾今既老隱則、非吾世也、嗣子崇興之世也、崇興亦能服勤、能得衆心、而法門益成榮、宿志之所遂、固非檀信佗力之靈、則不至此矣、余曰、一石之動、萬人之力、萬人之力、領之者一上人也、上人生平、津梁濟濟不忘、此其福報、圖通之力、今爲之寶筏、而致之者、亦未可知也、使余親在其地、面見之者乎、猶有可記者、今以上人所條陳、爲龍淵石記云爾、于時文化六年也、

己巳初冬

中野煥 撰

銘曰

龍之潛處、靈而爲池、其質堅重、千人緝之、以供淨用、人漱清

漪、日洗煩惱、水德無涯、

文化五年秋、自袈裟丸村川中、移此大石、事詳于龍淵石記中、

龍田中野煥識

圓光教寺 西本願寺宗、越中國八尾聞名寺末、永正十一甲戌年道場開基、慶長八癸卯年號正覺寺、享保初改圓光寺、其後號照曜山、本尊阿彌陀如來、境內二段五畝十五步、畑高五斗五升一合境外、此段別七畝步、元祿七甲戌年檢地名受、正覺寺、同十二己卯年境内外除地、

寺傳云、始祖釋正圓は、俗名岩佐喜太郎正直と云、高原郷の領主江馬家の臣なり、明應四乙卯年、家を長子善直に譲り、公務を遁れ、諸方遊歴して大坂に至り、蓮如師の勸誘を聞き、感心慶喜して剃髮をねがひ、門侶と成り、落合村に居、後病に伏、六男子を招き遺言して曰く、浮世は只夢の如し、各早く佛乘に入て、出離を求むべしと言置て、明應六年八月寂す、六男子、主君江馬時綱の前に出て、按ずるに【江馬系譜】に時綱なし、時經の父時正の晩年なるべし、父の遺言を申述べ、公務を遁れむことを希ふ、江馬の曰く、岩佐は予が家累代の舊臣なり、長男善直は家名を繼ぎ、末の五人は遺言に従ふべしとなり、善直歎じて曰く、公命亦輕からず、願はくは六人鬪を取て緇素を決せ

斐太後風土記卷之十二 古城郡古川郷 古川町方村

むと云、時綱許せしに依り、鬪を取て終に三男家をつぎ、岩佐喜太郎と名乗りけるが、江馬家其の三代後、輝盛の時、主従八日町にて討死せり、殘五人各剃髮して、一男は專勝寺祖、二男は圓光寺祖、四男は勝久寺祖、五男は了泉寺祖、六男は淨徳寺祖と成り、二世正祐、宇津江村海具江、垣統の草庵を結び、永正十一甲戌年、本願寺實如師へ、本尊を願道場と成、其の後不詳、古川城主鹽屋筑前守より、上町にて敷地寄附に依て移居、三世淨味、天正九年、白川照蓮寺より紀伊國鷺森へ、軍中見舞の使僧たりしとき、顯如師、本尊木佛安置の裡書を與へられぬ、天正十七己丑年、金森家、古川を今地に移されし時、諸人に先だちて下町荒木川の邊に移れり、其の褒美として、杉板二百枚を賜ふ、四世淨善、慶長八年准如師より、正覺寺と寺號を許さる、彼の敷地は、川に近く度々洪水の恐有に依て、移住を國守へ願、種村宗雲の舊地、今の地を賜ふ、六世淨善、照蓮寺宣心高山第三世龍興院の勸氣を受け、越中國八尾聞名寺に依り、彼の地に居ること八年、聞名寺覺禪高山へ來り、城へ訴へて淨善が歸國を許されしが、翌延寶四年、彼の地にて寂す、七世淨真歸國の後、照蓮寺を離れて聞名寺末に成、元祿八年、増島城廢毀の時、其の門を移建、八世淨明洪鐘を鑄造、○本尊裡書 方便法身尊形、永正十

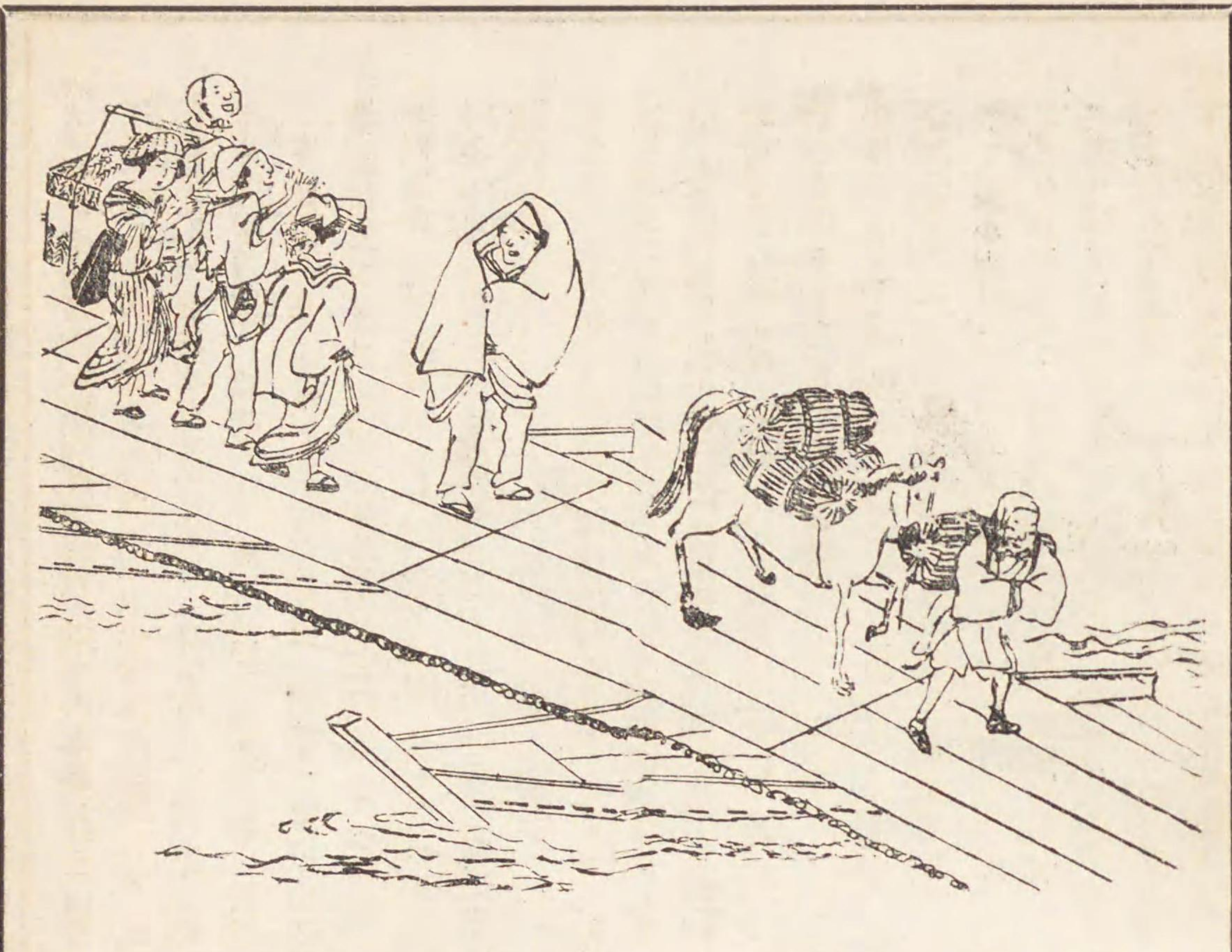
一年霜月日、大谷本願寺實如在判、飛州吉木郡、打江海具江洞、釋正祐。○本尊木佛裡書 木佛尊像釋顯如在判、天正九年三月、飛驒國古城郡、古川上町垣株堂什物、願主釋淨味。○洪鐘銘 嗚呼大哉、鐘之爲德、誰能得稱、震聲三界、覺夢五乘、宣其濟世、奚翅集僧、劍輪便解、地府皆憑、降伏魔怨、除結无遺、古聖所造、龍宮藏之、茲器維則、非創梟饜、四天乾闥、因循作爲、銅石雖異、香刹宜施、聞階不退、允由決疑、鏗々梵響、惟佛慈悲、嗚呼大哉。延享五年歲舍戊辰某月日。

一向教寺 西本願寺宗、越中國八尾聞名寺末、永正十三丙子年開基、元祿二己巳年號一向寺、其後年代不詳號大乘山。本尊阿彌陀如來。高野村舊地除地屋敷二畝二十九步。高野村除地外村寺院と同。元祿年中より住居大水にて損地、文政三庚辰年より、古川下町借地。

相傳云、開基大乘は、古川郷高野村打越にて、眞言宗、奇覺院の第八世、大雲坊と號す。諸國遍歴して越前吉崎に至り、蓮如師の教化を聞き、歡喜して密宗を捨て、其の門に入り名號を授り、歸國の後、高原郷吉田村聞名寺……へ度々行て、法問深切なり。二世了善、永正十三年、實如師より本尊を與へらる。村内下垣内に移し、垣内堂と號す。八世了諦、元祿二年、寂如師より、本尊木佛裡書、及寺

號一向寺を與へらる。十三世了念、洪鐘鑄造、十四世了惠、古川下町今の地に移。○本尊裡書 方便法身尊形、永正十三年丙子七月二十八日、大谷本願寺釋實如在判、聞名寺門徒、飛州古城郡古川郷在家、釋了善。【飛州志】に按に古川郷在家村今はなし、高原郷に、在家村あり。○禮彦按に、里傳に、了善か父大乘は、元高野村眞言宗奇覺院の八世の住持たりしが、越前吉崎にて、本願寺蓮如師の化導に隨ひ、密宗を捨て其の門徒になりし由なれば、歸國後奇覺院をも捨て、村家の女を配偶りて住て、了善を生みたりしが、成長後、實如師に謁、本尊を得しに、いまだ道場も建てざる以前なれば、在家と記したるならむ、其の垣内堂を建てし由、里傳に見へたり。

○洪鐘銘 文化元甲子年所鑄、四言五句、五言八句、句意不調、押韻不悞、採用に不足銘なれば略之。
宮川 南廣瀬町村より北中北村に至。古川郷の條下に詳記舟橋。高野・畦畑・平岩・大村、五ヶ村、稻越組・保組等通路、舟十七艘維、舟長五間、幅四尺三寸、底幅三尺二寸、艫五尺四寸、艫三尺七寸、鐵鎖長八十五間。昔は字舟場と云て、渡船なりしを、文化年中、始めて板橋を掛けたりしが、出水の度ごとに流失、掛繩度ごとに、河幅の狹處に掛る故に、橋場變り、且橋の落ちし時には數十日往來もならず



斐太後風土記卷之十二 吉城郡古川郷 古川町方村

れば、安政の初、村長、加藤彌壽、長谷川信平相議て、村々の舟、普譜舟と唱へたるを借集して、維ぎ掛け渡し試みて、越中國鹽村より船匠を雇來て、連に造終て安政五戊午年漸掛け竟ぬ。(以下原本)
舟橋 高野、津等 通路、古川上町に在。舟十三艘繫、長五間、幅三尺五寸、鎖長八十間。宮川に繫渡す、元は板橋なりしが、町縣に同じく度々流失せしゆゑ、慶應二丙寅年、舟橋になしぬ。

荒城川 東是重村より流れ來り、眞宗寺下にて宮川に入る。此の水源、荒城郷折敷地村、森部村の山奥より流れ、荒城郷を経て是重村・上北村より、町縣に至り。又別名を蕪川とも、吉城川とも唱ふ。魚、鱒・伊具比・鱒。
吉城橋 亦稱霞橋俗欄干橋。長二十二間、幅二間半、荒城川に架。高山町より北國往還の通路。

増島古城 天正十七己丑年、金森長近入道素女法印築かる所なり。其の始天正十三乙酉年、本土討入の時、二つ屋口より押來り、先古川城野村に着、當城は往昔、古川左中將及古川二郎の居城なり、古川二郎より、鹽屋迄の傳は詳に知りがたし。其の後鹽屋筑前守の居城たり。夫より筑前守は、越中新川郡を討取、越後の上杉に關して梅の尾猿倉に城を構へ、目代として細江彌右衛門頼定宗治を置、其の身

れば、何程の事あらむ、遠矢に射殺せと、宗泰か下知に隨ひ、鎌を揃へて射けれとも、名譽の者なれば屑ともせず、大手を廣げて追廻るに、皆蜘蛛子を散すが如く逃失せたり。然るに日も暮ければ、軍は明日のことよとて各陣所に引退きぬ。爰に宮谷寺の佛山と云へる僧は、牛丸が所縁なりければ、双方へ和解を説て、事故なく和議ありて、相引に陣拂しけるとなり。此里傳に、年月を記さざるは、いと疎略なることなり。是は天正十一年のことなりき。

國分尼寺跡 古昔一名法華滅罪之寺、上町里傳曰、往古上町に國分寺あり、字上町、亦是塔の開基年代不詳。七日町へ引たるならむ歟と云へり。熟考ふるに、○【續紀】十四卷初丁云、聖武天皇天平十三年正月丁酉、故太政大臣藤原朝臣家、返上食封五千戸、二千戸依舊返賜其家、三千戸施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料。○【同書】二、同年三月乙巳、詔曰云々、去歲普令天下、造釋迦牟尼佛尊金像(銅像、又は木像に金泊を押たるを云へる歟)高一丈六尺各一鋪、并寫大般若經各一部云々、宜令天下諸國、各敬造七重塔一區、并寫金光明最勝王經、妙法蓮華經、各十部、朕又別擬寫金光明最勝王經、每塔各令置一部云々、又每國僧寺、施封五十戸水田十町、尼寺水田十町、僧寺必令有二十僧、其寺名爲金光明四天王護國之寺、尼寺一十尼、其寺名爲

法華滅罪之寺云と見え、又同十九年十一月の詔にも件の事いまだ成らざるにつきて、諸國司の怠緩を咎めて、催し仰せられたりしが、其の後成就ぬと見ゆ。○【文德天皇實錄】卷第一云、嘉祥三年夏四月壬戌、地震、飛驒國講師、傳燈滿位僧德嚴上奏、諸國國分二寺、安居修行、爲國誓念、而此國舊來不修此法、論之佛理、可謂闕如、請准諸國、每年薰修許之、とあるを能く思へば、七日町なる國分寺は僧寺にて、當昔より今に現存、上町なるは尼寺にて在りつらむ。爾るに年代不知、廢寺に成果て、字に塔之腰の名のみ残りて、畑より古瓦を掘出すことも有て、石礎も残りたるならむ。○弘仁十年己亥秋七月二十九日甲戌飛驒國分寺災ありと見たれど、當時は再建ありしにや。嘉祥より御代も年號も、前なればなり。

官倉爲登米 古川官倉收納組(村々の條に記し置ぬ)村々より、毎年十月(更二人、貢米取立出役せり)納めたる貢米を、翌年二月雪消へて道路乾ぬれば、高山の官倉へ輸收むるを古來爲登米と唱ふ。其の頃に至れば、家に飼置たる馬の毛髪を日々梳り、當日は鞍に金具・靑貝など鏤めたる纒、また鞆には家々の紋、龍の紋、鬼面など赤く白く種々染めつけたる轡・面綱其の外美々しく仕立、官倉の貢米を爲負、馬を躍らせ、空を驅けるが如くいさみ立て、

三里二十餘町の道を二時ばかりに、高山の官倉へ先驅せしを、戸前を取と唱へて、人も馬も其の日の面目とす。廳より末廣の扇など賜はりしこと、たび／＼ありしを、諸人羨みて、何もれ先驅せむと努力るとぞ。

桑市 春蠶・夏蠶を養ふころ、村々より桑葉を扱摘みて負來て商ふこと、高山町また他の郷村の、桑市に凡そ同じ。歲暮市 歲暮になれば、毎年十二月二十二日・二十七日の日と、越中國濱の商人、また高山と古川の商人等、來つどひて、春の儲の品々、蜜柑・香縁・枸櫞・刻昆布・魚卵俗云、數子・魚類、其の他を賣買すること、高山の歲暮の市と大かた同じ。

○上北村 縱十町、横八町。高五百九十四石二斗五升四合、山林段別木數不詳。家五十三戸。人二百三十餘人。産物 米五百石 稗二十石 大麥十五石 小麥二十石 大豆十石 小豆二石 粟六石八斗 蕎麥三石六斗 桑一萬一千貫目 麻二十貫目 楮二十貫目 大繭三十五貫目 小繭二百貫目 稻筵百五十束 菜種一石 菌三十貫目 東方 山本村へ十町。西方 中北村。南方 古川町縣へ八町。北方 山。高山三里三十町。村名義は、氣多若宮神を祭れる村故、氣多の村と稱して、後三村に分れて、長祿・寛正の頃の國司古川左中將、又其の後高野城

主古川二郎の盛なりし頃、古川より北方に當れりとて、北村とせしならむ。古しへは、氣は計の假字にのみ用ひたりしを、漢音を用る世に成て、氣候氣色天氣などいへば、氣多を喜多と心得違たる成べし。氣多若宮神社 神階從五位上。祭神大國主神・御井神。境内 往古此御神の社地は、今の杉本の舊地か、字谷口の上野にか座しつらむ。明治五年壬申八月神社調の時、氣多若宮は古來上北東岡に御座たれど、御名埋たりと官訴せり。【文德天皇實錄】第三云、仁壽元年正月甲戌朔、庚子詔、天下諸神不論有位無位叙正六位上、



【三代實錄】第二十三云、清和天皇貞觀十五年二月丙申朔、二十八日癸亥、飛驒國司言、大野郡愛寶山、貞觀十三年十一月十八日、十四年十一月十二日、今月十五日、三度紫雲見とある大野郡は、荒城郡の誤なるべし。此の奏達を執奏の人、舊の本府にて、愛寶山を見てと思へるならむ。是は廣瀬の國府より、愛寶山に紫雲の變を見えて奏したるにて、其の愛寶山は、上北村の上なる安房山と後世訛りて唱ふる名高き山にやありつらむ。又云同年六月甲午朔云、九日辛未遣使於賀茂、松尾・稻荷・乙訓・貴布禰神社奉幣祈雨也、十九日辛巳、遣散位從五位下好風王、神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道於伊勢大神宮奉幣祈甘雨、是日雷、廿日壬午降雨、八月癸巳朔云々四日丙申、駿河國從五位下、美知天神能登國從五位下高倉彦神、並授從五位上、飛驒國從六位上氣多若宮神從五位下とあり。從六位上は、正六位上の誤なるべし。(朝廷の祈雨のことのみ記して、諸國の祈雨は省きたれど、此の氣多若宮神には紫雲の祥瑞と、甘雨の降りしことを賞め給ひての加階ならむ。其の後に亦、【三代實錄】卷第四十四云、陽成天皇元慶五年九月丙午朔、十九日甲子地震、二十日乙丑亦震、二十一日丙寅二度震、冬十月丙子朔五日庚辰夜地震、七日壬午地震、九日甲申授飛驒國從四位下水無神從四位上、從五

位下氣多若宮神從五位上、正六位上加茂若宮神從五位下是は詳に記されねば知れがたけれど、地震の事に靈異を示し給ひしに依て、位階を進め賜ひけるにや、○【神名式】能登國羽咋郡氣多神社、名神大、【一宮記】云、大己貴命也、越中國射水郡氣多神社、云同上とあるを、往古此の荒城郡深河郷愛寶山(今云、吉城郡古川郷上北村の安房山)の麓に、勸請せしなるべし。抑能登國に座ませるは、【三代實錄】卷第二云、清和天皇貞觀元年己卯春正月戊午朔、二十七日甲申、京畿七道諸神進階、云、越前國正二位勳一等氣比神從一位云、加賀國白山比女神正三位、能登國正二位勳一等氣多神從一位とありて、白山神よりも位は尊く座す神なり。是より先、【續後紀】卷第三云、仁明天皇承和元年九月癸酉、坐能登國正三位勳一等氣多大神宮、禰宜祝二人、始令把笏と有て、大神宮と記され禰宜祝に把笏さへ免し玉ひしことにて、其の御神威ぞ仰きまつられぬ。其の氣多大神を此の村に齋き祀れるに依て、若宮と稱へるか、【神名式】加賀國江沼郡に、氣多御子神社ませり。【往野册子】總社考に氣多神は父神にて加賀なるは御子神歟、其を若宮とて此にも齋へる歟(所在未詳、古川郷なる北村には有るべからずとあるは、くはしからず。此處を離れて氣多てふ地何方かはある)とあるを熟

思ふに、【古事記】上卷云、大國主神、亦名謂大穴牟遲神、亦名謂葦原色許男神、亦名謂八千矛神、亦名謂宇都志國玉神、并有五名、故此大國主神之兄弟、八十神坐、然皆國者避於大國主神、所以避者、其八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負、爲從者率行、於是到氣多之前時、裸菟伏也、云(氣多前)の故事は、皆人のしる所なれば、省きつ故其菟白大穴牟遲神、此八十神者、必不得八上比賣、雖負、汝命獲之云、故其八上比賣者、如先期、美刀阿多波志都、故其八上比賣者雖來、畏其嫡妻須世理比賣而、其所生子者、刺挾木俣而返、故名其子云木俣神、亦名謂御井神也とあれば氣多若宮神と申し奉るは、大穴牟遲神と御井神と御父子の神を、並祭れるならむ。【記傳】三十二ハウに、韋とは物に用ふる水の在る處を云て、田に水を引く溝をも云ひ、井も是也(されば、古は川などにも、井と云へることあるは、水を汲みとる處を云へるなり)と見、又十卷ハウに、御井神とは、此神處々に井を作りて、民の利をなし玉へる御功ありしに因て、稱へ奉れる御名なるべし、さて御井神社は、まづ出雲國には、【帳】に秋鹿郡と出雲郡とに見え、又大和國宇陀郡、美濃國多藝郡・各務郡にも見ゆ。さて神祇官に坐す、座摩御巫祭神五座中の、生井神・福井神・綱長井神と申す

も、此御井神を稱奉し三名なるべし。【臨時祭式】に、御井祭と云ふも見えたり。井は殊に重くすべき處なれば、誰が家にもほどほどに隨ひて、此神をば齋ひ奉るべき物ぞ(貞觀元年正月、生井神・福井神・綱長井神等に、從四位上を授奉り玉へること、【三代實錄】に見えたり)とあり。大國主神の御靈と申し、御井神の御恩頼は一日もなくては叶はぬ事なり。此の氣多村今の上北、中北、下北に、上古齋祭りしは、愛寶山今云安房山より出る谷水と、荒城川より堰上げし用水と、毎家に朝夕用ふる井水と、絶ることなく涸ることなく、常磐堅磐に、公民を幸はへ恵み玉へとて拜祀たりけむ。(三村の高千四百七十餘石の田を作り、永代莫大の米穀を得るは、皆此の御井神の御恩頼なり)其を後世に至りては、如此御神德をも謝奉らず、氣多を三村上北分し頃か、天正の末、高田神社と杉本社を、此處に移し祀りし時にか、下北村に遷し座せ奉りけむ。如是有めでたき愛寶山も、星霜を経るまゝに、其の傳も失せて、いかなる嗚呼の者か、免して當山を佛地とし、年代不知、安房山と名を改、清峰寺を建てたりけむ。

上氣多用水路四條

一安房山南麓泉谷の水を引、字原田迄、用水路長十六町四十間、巾三尺。

一同泉谷の水を分て引、字釜の上迄、用水路長十六町四十間、巾六尺。
一同蛇谷の水を引、字釜上迄、用水路長十五町五十間、巾五尺。

上代は、右三條の用水のみなりつらむ。さる故に字を日やけ田へは水不及つらむ。

一中昔鶴巢村字流田にて荒木川の水をせぎ上、向是重田間より釜の上迄、用水路長十七町四十間、巾九尺。右四條の用水あれとも、早年にはひやけ多く、沼田多にて、霖年には水腐多き村なり。故に御井神を祭りては、諸田旱水損なきことを祈來たる村なるべし。

安房山清峰寺跡 村の長にあり、南は山本村桐谷村、北は太江村、東は柏原村、西は下北村に跨り、山頂に至るに麓より八町、往昔伽藍有て、塔頭もあまた有りしとぞ、今は只大小の寺院、及古井等の跡残り。草創年代不詳、美濃國郡上郡、長瀧寺の末寺にてや有りつらむ。【飛州志】に、今益田郡久津宮藏、大般若經裡書云、正和二年正月五日、於飛驒國清峰寺長光院書寫、執筆天台末學、道學坊願主直圓とあり。其の後廢寺と成けるならむ。本尊聖觀音は今鶴巢村の觀音堂に安置せりとぞ。
安房初雪 新寒夜來雪、前峰已改顔、似賀豐年瑞、高揖里門

間 平安 中島規 號云慶軒

産土神杉本社 祭神天照大御神、相殿、廣幡八幡大神・春日祭神四座・高田大神。境内七段七畝廿七步、社人 天木部。社傳云、吉城郡古川郷上北村、田城東岡の上に鎮座す大神は、御社の御名を、杉本と申して、掛巻くも畏き大御神になもます、相殿に廣幡八幡大神・春日の加須賀大神・薦枕高田大神を合せ祭れり。杉本と申すことは、往昔同郷是重村の杉本と云ふ所に、いつの頃よりか鎮座けるを、天正のころ、金森源朝臣可重君増島城築かれし時、所の鎮護として今の東岡にしも遷して、宮柱定め奉られし時、舊地の名をも、杉本の大神とは申し奉るなりけり。しかして御年代を寄奉り、増島の里と上北村との御民らをして、此御社の産子と定められけるなり。増島の里、今は古川の里と云ふ。かくいふ故は、もと蛤城の麓、宮川の際、古町に在りしを、同時民等の家をも引うつされて、其の舊名をとりて、古川とも云ふといへり。其の後年移りて、いと荒玉へるを畏みたまひ、金森源朝臣頼直君、宮柱新に造作玉ひけるは、萬治三年なり。

○相殿高田神社神階從五位上 社傳云、古川町字高田と云ふ所に鎮座けるが、亂世打ちつゞき、甚大荒ましけるに、杉本社を今の地に遷し奉られし時、此高田神社をも遷し奉

りて相殿に請奉られしとなむ。此の御社は、殊に荒れまして、式内の御社にて座ましけるも、知られ玉はず。杉本社は、其中にも社の勢ひよろしかりけむ、故杉本社を、正殿に請奉りしものか。【總社考】云、【古事記傳】に、高田はアゲタ、下田はクボタと訓べし。縣もアガタにて上り田なり、畠のことなり。田と云ふは畠をも統たる名にて、其の中に水つかぬを畠とも、上田とも云、水田よりは、高く上りたる由なりと有。是をもて思へば、此高田も、アゲタとかアガタとか訓むべきか。たかだと云ふ地、國內にあることを聞かず、今高原郷數河村に、アガタ明神と申して、字にも上田とかけり。中略若は、是高田神社ならむか云々といはれたるに、後藤基弘（古川民にて田中大秀門人）は早う古川下町にあることを書入れおかれて、同書奥書に、此の説を宜として、ゆめ／＼其社などな定ぞ、猶いと熟考たすべしと荏野翁も驚かし置れつるをもて思ふに、高田と云ふ地、古川下町、今は町屋鋪となれる中央にて、街道より坤方にあり、此の邊自ら高く上りたる所故、高田と云ふか。【記傳】に阿宜多と訓べし、字のまゝにタカダと訓むも、あしからじ、國々にしか書く地名も多し云云ともあれば、此の高田も、古へはいかに訓みけむも知らず。後世文字訓に訛り來れる地名、今最

多し、字に上田と書て、高原郷數河村にては、アガタ、舟津にてはウハダ、益田郡なる村名、東ウヘダ、西ウヘダなど云ふ有。さればアゲタ、タカダ何れにもあれ、高田と云ふ地名は、郡の内外にあることをきかず、爰に往昔社まし／＼たるを、家居を移轉せし時、社も遷し奉られしといへば、正しく高田神社なること疑なかるべし。○禮彦按するに、此の社傳は、亡友古川の蒲八十村こそ、書き遺しつらめ、高田の訓は、古川町縣に記せし如く、【神代卷】の古訓のまゝ、阿賀多神社なるべし。如此村名にさへ負し高田神社を、天正年中に、いかに領主の命なればとて、舊の社を離し奉りて他村に移し奉りけむ。假令領主は命せらるゝとも、古川の諸民幾度も歎き願ひて、舊地に在來のまゝ、拜き祭るべきことならずや。しかし社を他村の岡上につつして、其の跡を田畠にせむとの民の愆情も起りて、輕々しく移し奉りしにや。其も移し奉らば、杉本の社と別社にして、高田神社の御名を萬世に失なはぬやうに爲すべきことなり。其の故は【文德天皇實錄】第三に、仁壽元年正月甲戌朔、庚子詔、天下諸神不論有位無位、叙正六位上とありて、又【三代實錄】第十四、清和天皇貞觀九年十月五日庚午、授飛驒國從五位下、水無神、云、高田神、竝從五位上と見えて、歷朝の聖主の叡慮を籠

させれて、位階を授進させ賜ひ、【延喜式】神名帳にも、飛驒國八座のうち、荒城郡五座、大津神社・荒城神社・高田神社・阿多由太神社・栗原神社と、載せられたるとなれば、いとく畏みて、末世に至るまで、諸人の尊み敬まひ奉る様に、拜し祭り置くべき事なり。其を一社に合祀て、輕々しく爲し故に、杉本社とのみ唱へて、高田神社といふ人だになくなりしは、いとく歎かはしく、可惜事にぞ侍る杉本社棟札銘、奉新御建立高顯院施主、當國大守、源朝臣金森長門賴直公、御武運長久、息災延命、如意御満足祈禱所萬治三庚子天六月大吉祥日、普請奉行彌川自得、天木清五郎神輿、神輿は高顯院の寄附にて、八方に懸けたる鏡と瓔珞とは今も其を用ひ來れり。當昔京にて調られけむ其二品を納め置ける箱の蓋書付、森與三左衛門殿、丹羽次郎左衛門、額面一枚、竪二尺七寸横四尺一寸餘

奉懸 御寶前 繪彩色
大守公 源三位
爲 猪早太
御武運 射鷓圖

長久 加藤伊左衛門 笠井五 後藤平 加藤又 小村勘 笠井彦 敬
寛文五 林鐘吉良日 白

○同一枚竪三尺餘横二尺餘彩色神馬雜色一人、寛永五戊子七月吉日願主敬白。○同一枚竪一尺一寸餘横二尺彩色騎馬雜色四人萬治三曆子九月吉祥日。○同一枚竪一尺一寸餘横二尺彩色柿本人麻呂像年號文字難見。○同一枚竪四尺二寸餘横六尺墨畫奔馬圖天和二戊午九月吉祥日古川町。
○同一枚竪三尺餘横二尺古川町縣氏子所咏、御社十景歌。
山本夕霞 基 弘
夕月のかけはほのかに見えながら、霞をくらし山もとの里 宣 文
増島櫻花 立ならふ松のみとりも一しほの、色増島の花さかりかな

清峰郭公 清 音

ほと、きす鳴なるこゑも山のなの、清峰たかく過るよはかな

吉城川螢 知 綽
さつき闇飛かふかけもよしき川、浪の花ちるよはの夏虫

高野殘月 正 茂
高野山つまとふ鹿のこゑきつて、殘るもさひし有明の月

稻葉紅葉 八 十 村
さとの名のいなはの末をはしめにて、秋ふかくなる山の色かな

打江時雨 立 道
函淵の瀧上山に雲たちて、うつ江の里に時雨ふる見ゆ

古川初雪 彌 尋
うち渡す水田の面はつれなくて、初雪白しふる川のさと

五峰寒鐘 健 平
河の瀬もたえて更行夜あらしに、こぼらぬ鐘の音も寒けし

斐太後風土記卷之十二 吉城郡古川郷 上北村

蛤城棧道 重 郷

もの、ふのなれし往來も柴人と、かはる高野の山のかけはし

天保八酉年三月 杉二本社中
○同一枚竪三尺餘横二尺東岡十五景三十首歌、催主清民

古巢出てまたうら若き鶯や、まつ谷口にくちならすらん 幸 言

ゆき消て鳴音なかる、鶯に、行人とよむはるの谷くち 幸 吉

古溪朝霞 重 郷
古川の里の梢にせかれてや、霞の水脈もふかきあけ方

あさ霞たてるみとり二本の、杉もわかれぬ古川の里 了 冠

蛤城櫻花 景 憲
分なれて古城の山のかけはしも、あやふさ埋む花の白雪 美 佐 子

はる毎にほひはたかし高野山、としをふる城の花の梢も

清 魚

栗谷新樹
同じ色にみつ枝しけりてあさりつる、かけも若葉の夏の粟谷

元 路

はなさかむ五月の空は遠山や、夏深けにもしけるくり谷

賀 次

三北早苗
早苗とるさかりきぬらし御民らが、たうたと、ろく北のさとく

教 乘

とりやまぬ北の田面の早苗哉、稲葉の山はくる、日かけに

秋 足

上野郭公
かみしもの上野はるかにをちかへり、名のるか北の山ほと、きす

晚 稻子

卯花の雪の上野の子規、あさきた寒く聲を聞ゆる

詠 寛

雁部初雁

おのか名をたのむ心か初雁の、くる秋ことにこゝに鳴くらん

清 民

秋をへて名におふ沼にくる雁も、かす増島の陰たのむらん

泰 郷

高野夕月
ひくらしのあかす鳴音も高野山、いり方をしき夕月夜かな

正 村

生茂る松も高野の山端は、梢にちかきゆふ月のかけ

重 泰

稲葉紅楓
うちなひく麓田かけて稲葉山、みねも色つく秋はきにけり

蝶 子

村しくれ過ていなばの山のはに、下てりまさる木々のもみち葉

清 見

貴船時雨
かせさはく雲の波路を行きかへり、貴船の森に降しくれ哉

宣 平

かきくらす千町の末にほの見えて、貴船の森を行く時雨かな

俊 夏

蕪川千鳥
猪住山夜くたつ月のかけ晴れて、あらしの川に千鳥なくなり

保 平

あらし川風による波よるは猶、立居さためすちとりしはなく

章

清峰積雪
雲はる、雪の光も清峰の、名はつもりてそあらはれにける

良 雄

きよ峰やしける尾上の松か枝も、下をれぬべくつもる雪哉

道 守

山本樵夫
陰ふかみ暮れぬとつくる鐘の音に、山もとさしてかへる柴人

奥 稻子

あさけたく烟とともに立出て、やまもと山にのほるしはひと

清 音

五峰曉鐘

斐太後風土記卷之十二 吉城郡古川郷 上北村

いつしかもいつ、の峰のあけの鐘、老のねさめの友となりつ、

秋 村

里人のうきよの夢をさませとや、あくる野寺のかねひ、くらん

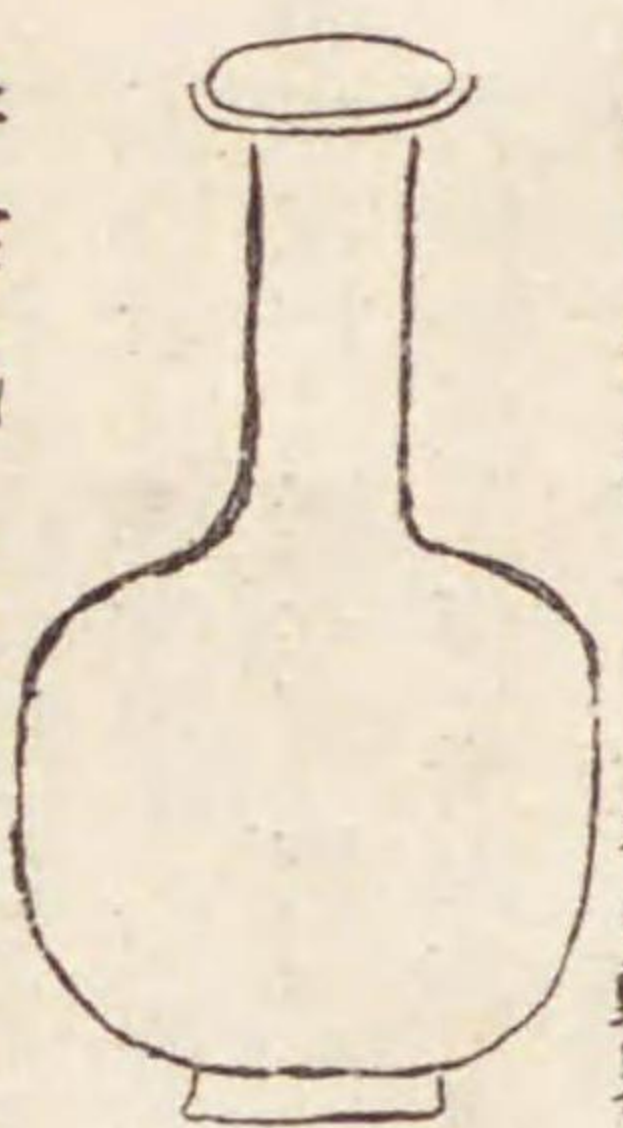
冬 俊

増島茂松
をちこちの山はうつみし霧の海に、一村しけき松やます島

八十村

言葉のしける陰と成りにけり、神のちはひや増

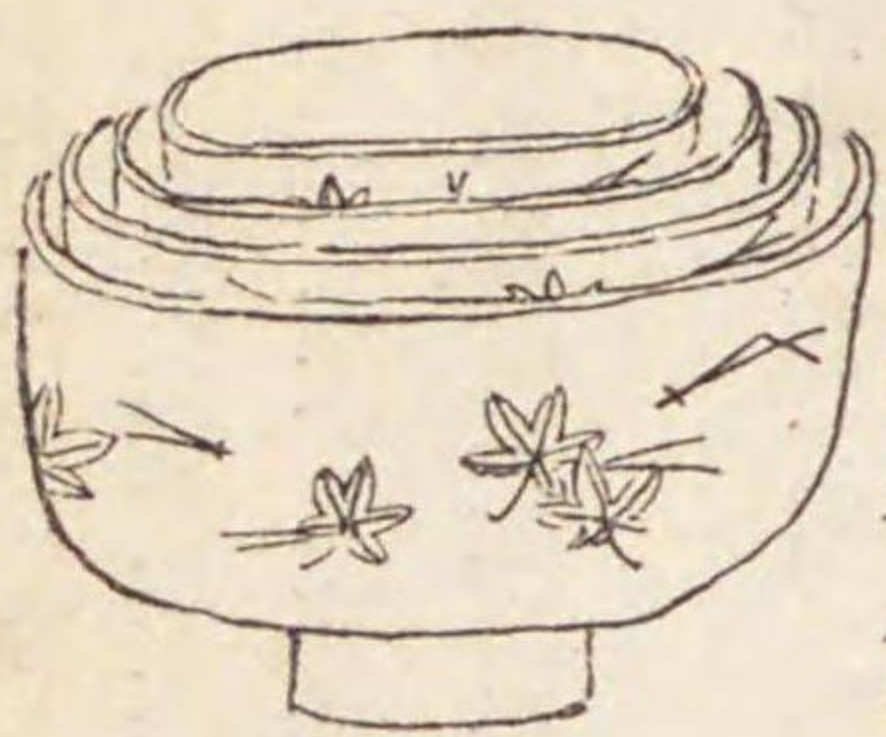
鼠色



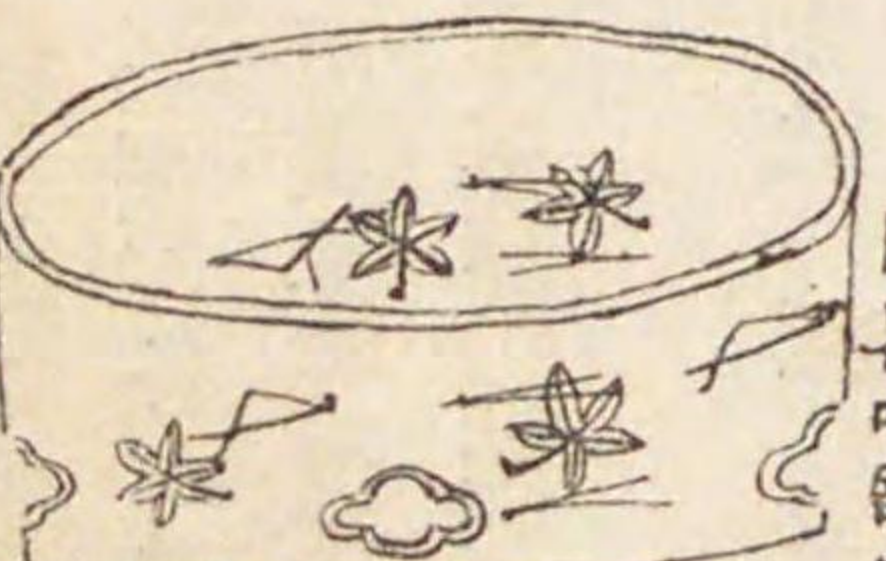
赤色甕器



陶器吹寄模倣



社人斎蔵 黒塗四ツ椀 松葉楓時繪



此二品十八前ハ 妙小路家ヨリ 傳來 柿小路家臣 方今社人 天木節菰

島の松

慶應元丑年八月

杉二本社中

社木、杉・松・櫻・楓

大榭 鳥居傍にあり、枝葉繁茂、枝蔓延、六間より八間餘、保童坊跡 村中に在來由不詳。○辛夷大樹の本に古墳五輪等數多あれども、文字よみがたし、但屋鋪の形残り。五峰山林昌禪寺 曹洞宗高山素玄寺末。天正十七年再興。本尊釋迦如來。境内六段四畝七步。

往古開山、宗旨、開基等不詳。寺傳云、故國司姉小路家、代々菩提所也。里俗傳云、舊地は小島郷沖之町村字古屋鋪の畠中に在り。其の後年曆不知、古川郷打江村栢株に在り。按するに、古川左中將の引移されしならむ。其の後又年代不知、上北村字大沼に引移、此の地後に田畑三段九畝九歩高山素玄寺除地と成。天正年中、金森家の増島城築の後、出雲守可重朝臣金森家と實家長屋氏、兩家追福の爲め、天正十七己丑年、今の地に引移再建せられたりとぞ。其の時の住持を中興天翁秀梅と云。秀梅は後に、慶長十四己酉年、高山素玄寺の開山始祖たり。其より此林昌寺を其の末寺とす。可重の實父、美濃國稻葉氏族長屋將監某、法名林昌寺園盛道林居士、實母は稻葉氏女、法號花林院丹窓正榮禪尼云。

○出山釋迦如來像一幅、達磨像一軀、永平寺道元禪師木像一軀、開山天翁秀梅木像一軀、禪堂三十三觀音、各木像、毘沙門堂、門、十王堂、金森出雲守可重朝臣畫像半髮平服、表黑燕模様裏紅、一幅、長刀銘尾州犬山住兼武一振、軍扇定紋付一握。

金森家寄附書翰一通、爲城著之嘉儀、渡邊外記迄御飛札殊一種進預致欣悅候其許彌御無異珍重事候不備。十月十五日金出雲寺頼時(花押)林昌寺御右

○中北村 縱七町、横四町、高四百三十五石三斗九升七合。古川町縣入作。無山林。無民家。

產物 米三百石 稗八石 大麥十五石 小麥十五石 大豆二石 小豆一石 粟十石 黍二石 胡麻二斗 荏三斗 桑二萬貫目 麻十八貫目 大繭二貫目 小繭十貫目

村名義は上北村に同。

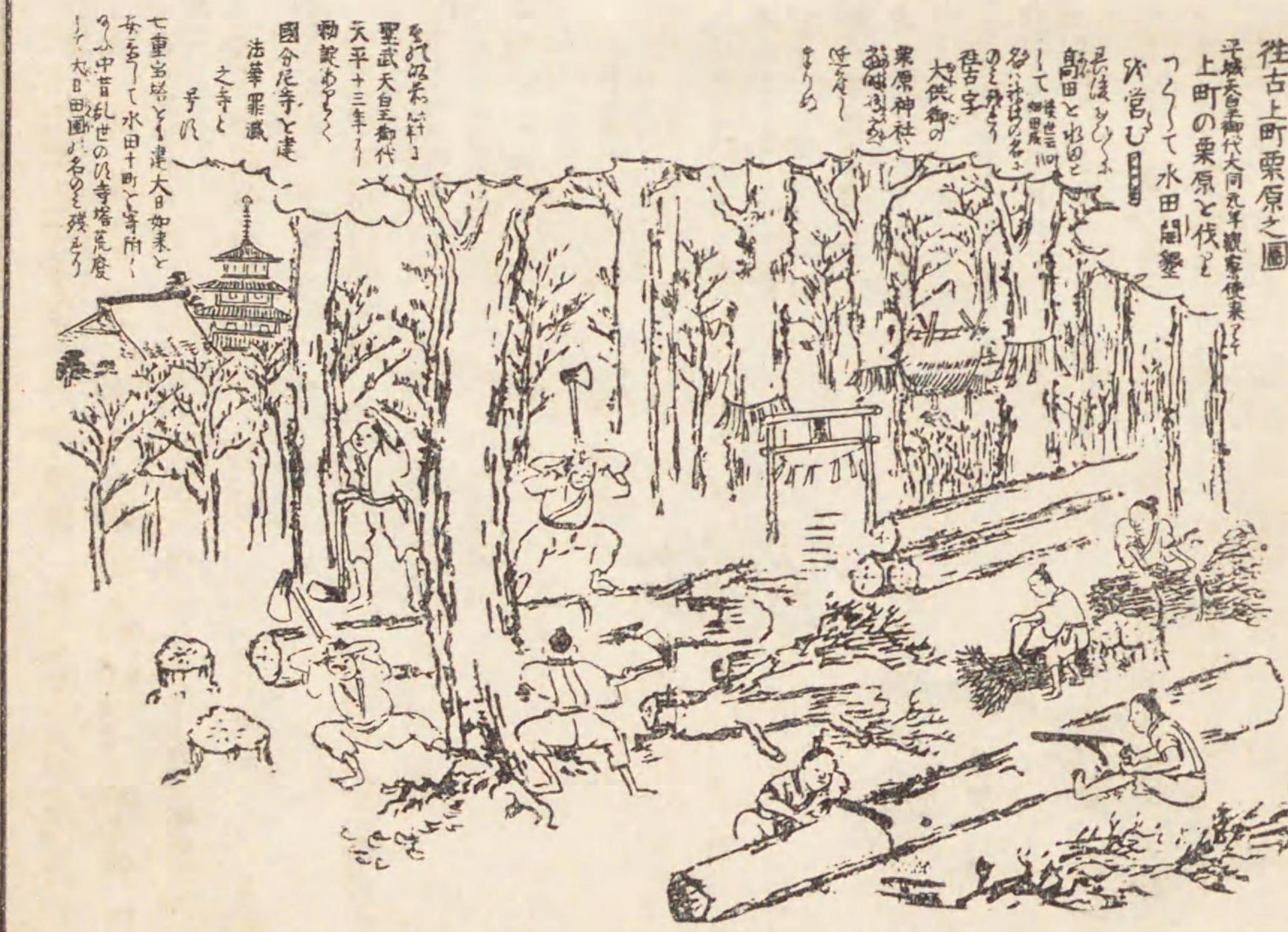
○下北村 枝村、種村、縱八町、横五町、高四百四十七石八斗八升六合。山林段別木數不詳。家四十九戶。人二百五十餘人。產物 上北村に同じ。米三百五十石 稗二十石 大麥十五石 小麥十五石 大豆八石 小豆三石二斗 粟十石 黍二石 蕎麥三石 桑一萬五千貫目 麻十五貫目 稻藎百束 大繭三十貫目 眞綿七把 小繭八十貫目 赤絲五把 荏五斗 菜種一石五斗 楮十貫目 赤土二萬貫目。

東方 中北村。西方 行眞村へ三町。南方 古川町縣八町。北方 山越太江村二十町、

村名義は上北村に同じ。氣多若宮神社 年曆不知。小坂明神に合祀。上北村に記。明治五年壬申八月氣多若宮は上北の杉本に座して御名埋たりと云。

産土神小坂明神 祭神不詳。御靈實石劍一個。祭日。氏子。境内二畝廿歩、除地。明治五年壬申八月神社調に、此の小坂神は八幡大神に座とぞ。

【神名式】に、信濃國高井郡小坂神社、但馬國出石郡小坂郷小坂神社、同國養父郡男坂神社座り、同神を祭りしにや、未詳。【村正書上】には、此の小坂社の祭神を氣多若宮神と記したれども、其は他村の人の入知慧なるべし。【寶曆除地帳】には、小坂明神宮地とあり。「元祿の繪地帳に尤此の社も愛寶山の山脈は續きたれども、いと〜端山の麓にて、名高き大山の直下に非ざれば、當昔彼の紫雲の祥瑞にて、神階昇進の故事も、此處にては符合せざるべし。されど天正年中、高田神社と杉本社を、上北村に遷し奉りし時、其處に古來祭れる氣多若宮神を此の小坂社に、合祭りたりしか、猶後考を待つ。其はいかにまれ、如此尊き神社の其舊地を離奉れば、いと〜可畏ことなりき。」



栗原跡跡新田之圖



金森侯（江馬家女房貞朝）
 金森町重朝臣増嶋の
 城主となりしに
 先之高野の江馬家
 へ移住し居り
 あつてに居
 ことと地
 なるに高野の
 息女入高原御中
 小志ありて
 手とりて、強
 石ありて
 行目見入
 江馬家の處女幸と傳
 金森侯の妾とて居りて
 一住なりて、目よと居りて
 幼名金森十四郎と稱
 成、の後金森元重重勝朝臣、
 稱して外相江馬氏の旧知高原御
 三千石の領主として、金崎村に
 治所と定めて居りて、一、二、
 江馬氏のうまむらり、小志ありて、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
 十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、



古川古城 旧古川町古之圖



斐太後風土記卷之十二 終

産土神住吉社 祭神底筒男命・中筒男命・表筒男命。祭日。
 氏子。境内一段三畝十步。
 下北城 【飛州志】云、在于古川郷、下北村來由未詳。
 古川城（三八九頁古川城參看）
 應永末年、初修築于向小島出張城於高野、中世國司師言
 卿老後居之、寛正元年古川左中將爲居城、其後年代不詳
 古川次郎居城、古川次郎子孫不詳、享祿四年其家斷絶、
 永祿初年鹽屋筑前守秋貞爲居城、
 天正初年牛丸相模守秀次爲城代、
 天正十三年金森法印據之攻諸城、
 同十四年據之治古城郡、
 同十七年毀之、
 天正十七年古川町を増島野に移す

大正四年十一月八日印刷
大正四年十一月十二日發行

大日本地誌大系第七冊 非賣品

斐太後風土記 上

日本歷史地理學會校訂

編輯兼發行者 蘆田伊人
東京市小石川區表町百九番地

印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

不許複製

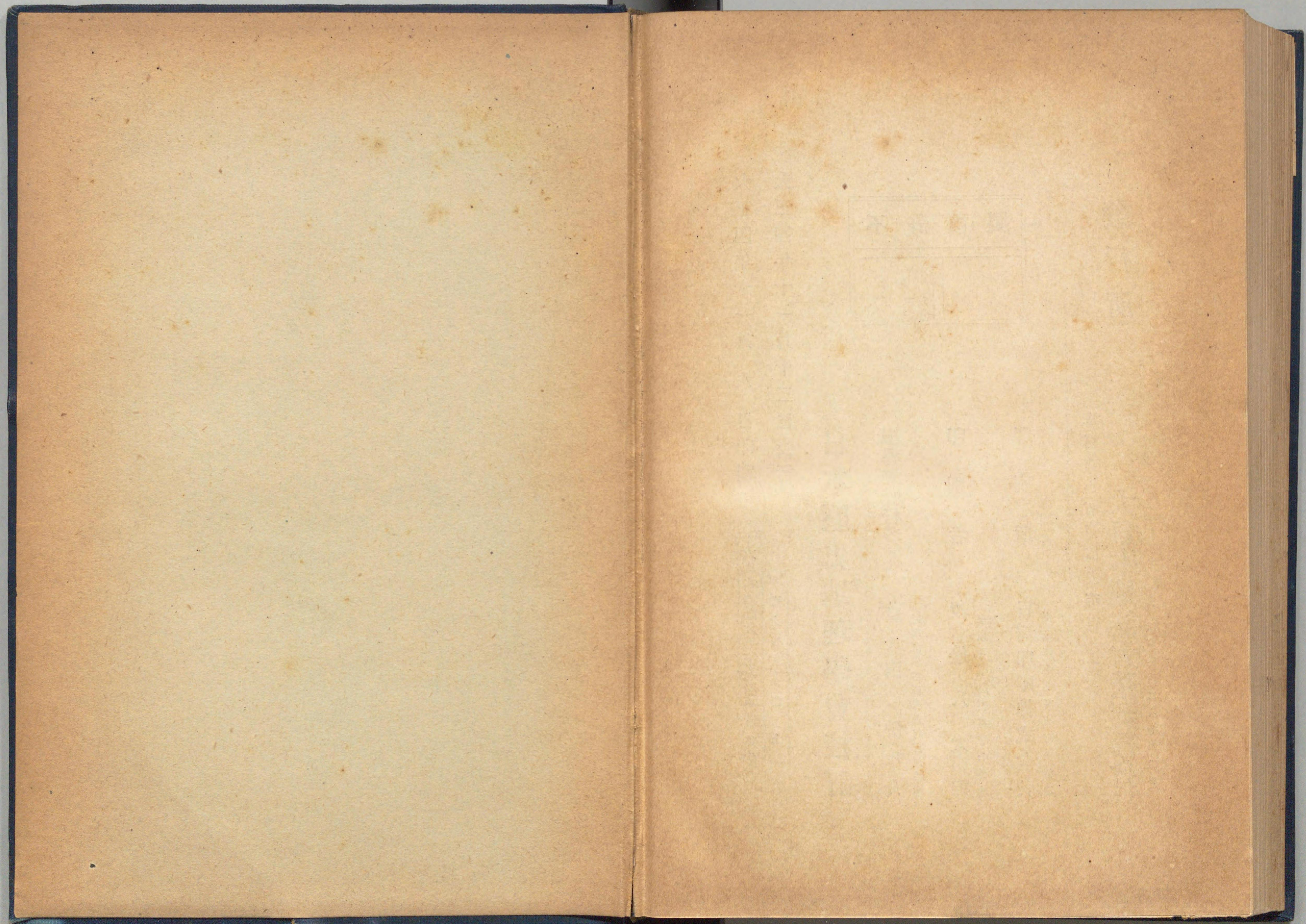


發行所

東京市小石川區表町百九番地

大日本地誌大系刊行會

振替口座東京二八七六二番



SAN-AISHA SHOTEN
電話神田二九七五番
三愛社書店

6

新編
新編
新編
新編

17